1977年8月10日発行
共産主義者同盟（RG）
第21号 200円　発行人　野村　忠

赤報

スターリン主義打倒、反スタマルクス主義止揚、革命的マルクス・レーニン主義復権の旗を更に高く掲げ　国際非合法党を建設せよ！

国際非合法党建設を勝利させよう！

❶はじめに
①中央集権主義の組織思想にもとづいて我々は進む

昨年一〇月二三日の我々への政治警察の一斉検挙攻撃からすでに九ヶ月、ここに『赤報』二二号を全国の労働者諸君におくることができるのは、我々の大きな喜びとするところである。共産主義者同盟（RG）への党名改称以来の五年間の活動に匹敵する、党の総力を上げた闘いを我々はこの九ヶ月の中で闘ってきた。闘いはいまだ終っておらず、この『赤報』二二号の発行は、我々が党建設の新しい段階に向けた闘いを更に一歩進めるにあたっての強力な武器となるであろう。

一〇・二三以降の我々の闘いは何よりも非合法組織の堅持を基礎とし、逮捕された同志達の奪還の闘い、及びそれとしっかりと結合した救対活動の展開によって継続された。政治警察の悪ラツな取調べのやり方、その内容についてはすでに我々が「RG救対ニュース」の各号で暴露してきたところである。多くの同志の完黙は確固とした共産主義的意識に裏付けられた党員及び活動家の義務として貫徹され、一斉検挙攻撃にかけた政治警察の思惑を粉砕した。そしてこの闘いと結びついた救対活動の急速な展開は非合法組織の健在とあいまって、政治警察への我々の反撃の橋頭堡を築いたのである。一定の不利な条件がある中で政治警察に屈服し、自共したる数人の同志達に我々は断固とした批判を集中し、敵の手から奪還する闘いをも闘い、勝利した。そして、我々はこれらの闘いの地平をふまえて一九七一年の革命闘争に関連して起訴された五人の同志の統一公判中での闘い、それと結びついた獄鑑の七名の同志が開ったハンガーストライキは、東京地裁刑事第一三部石田裁判官の欠席裁判の策動を粉砕し、我々は今日とりあえず四名の同志の統一公判をかちとることができたのである。

我々は一月に新たに二一名の同志の逮捕を許したけれども、その直後に二名の同志の釈放をかちとり党活動をさらに弱めることなく前進してきた。我々は敵の攻撃に対する反撃をバネにして新たな闘いがつくり出されていることを注目している。プロレタリアートの闘争は政治警察の弾圧によって圧殺することは出来ず、弾圧と抑圧そのものが新たな闘いを生み出しているのである。

我々はつながりの切れた連絡を回復し、非合法組織を維持し、獄中の諸同志の党活動を保護しながら、次第に新たな全党の活動の体制を整えてきた。今、共産主義者同盟（RG）は、試練をくぐりぬけることによって鍛えられ、党建設の新たな段階にむけた、次の歩みを踏み出そうとしているのである。我々の前途には更にいくつかの試練が待ちうけているだろう。しかし、我々が更に固く団結し、密集して進むかぎりにおいて、我々には恐れるものは何もない。

一〇・二三検挙攻撃の経験から我々が教訓を引き出そうとするとき、我々は一〇・二三以降ただちに開始された政治警察との闘争の第一局面、逮捕された同志の獄の闘い、それと結びついた獄外での闘いの総括を抜きにするわけにはいかない。我々のここでの闘いは、第一次RG及び第二次RGの闘いを越える質をもって闘われた。多くの同志の完黙の貫徹は我々が党建設の第二段階の中においてつちかってきた中央集権主義の組織思想にもとづいた党精神の強ジンさをプロレタリアートに示したであろう。同時に病気その他の条件があったとはいえ、数名の同志の政治警察への屈服を許した（例えただちに敵の手から奪還したとはいえ）ことの総括をも我々は断固としてやりとげる。このことは我々が一九七六年四月末政治警察の追及を察知して以降、一〇・二三至にるまで半年間の攻防を経る中で進めてきた党の思想的・政治的・組織的な飛躍にむけた作業が、この九ヶ月の闘いのなかで我々がいくつかの試行錯誤を経験しつつも着実に反撃の歩みを進めることを可能にしたことをも関連し、同時に、にもかかわらず我々が一〇・二三を予測できず、政治警察の一斉検挙攻撃を許さざるをえなかったということの総括とも関連している。我々はすでにいくつかの結論に到達しようとしているが、ここではまず何よりも、党内公開制の広範な適用ということにおいて我々が大きく前進していること、中央集権主義の組織思想にしっかりと依拠して、我々が組織上の さまざまの問題を一つ一つ解決して進んでいることを明らかにしておきたい。我々の党は今、非合法組織・合法組織・獄中というかたちで分断されて存在している。我々が今、もっとも精力的に必死に闘争しなくてはならないのは、機能的分権主義及び自然発生的連合主義の危険に対してであり我々は敵に分断された組織の状態を固定化したり、合理化することなく、密集して進まなくてはならないのである。中央集権主義の組織思想にもとづいて行動することの重大さについては、何べん強調しても足りないと、我々は考えている。

例を上げるならば、我々は第一次赤軍派の第二大綱領論争の失敗と第二次赤軍派の自然発生的結成第二次赤軍派の機能的分権主義にもとづく連合主義（獄中・もぐら社・革命戦線・中央軍・連赤以降の赤軍派の四分五裂を批判しなくてはならない。また日本共産党革命左派が獄中・獄外に分断された状態の中で、党内闘争の組織化に失敗し、「新党」派と獄中の分裂を生み、また連赤以降においてもいくつかの分裂を経験せざるをえなかったことを批判しなくてはならない。我々は分裂それ自体を問題にしているのではなく、ここには二派の諸君の組織思想の欠陥（綱領、戦術上の欠陥と結びついているが、それらとは独自のものとしての赤軍派の一人一党的な個人主義的組織思想、及び革命左派のスターリン主義的組織思想の欠陥）があらわれており、非合法組織・合法組織・獄中というかたちで組織が分断された事態において、二派の諸君が中央集権主義の組織思想にもとづいて党組織のすべての問題を解決しようとしなかったこと、その結果党内闘争の組織化に失敗したことを批判しなくてはならないと考えているのである。我々は我々の党建設の新たな段階を切り開いていく我々の歩みそのものによって、実践に二派の諸君の経験をのりこえ、批判しつくすことが問われていると考えているし、それは全く可能だと考えている。我々のこの九ヶ月間の努力の大半は、こうして、獄中――獄外を結ぶ新たな党の指導体制をつくり上げることにさきだられてきたし、与えられた新たな条件の下での組織活動の方法を確立することにささげられてきた。我々は否応なしに、検閲下での文書連絡による党活動を強制されることになったが、逆にこの条件を我々の党活動の定形のために役立てたばかりか、工夫をこらすことによって秘密活動の強化のために役立てきたのである。我々はかって、党建設の第二段階へ足を踏み入れるにあたって、赤軍派の機能的分権主義を批判し、中央集権主義の組織思想について強調したことがある。（『赤報』二号）。以降五年以上の組織活動の経験を経る中で、我々の中央集権主義の組織思想に対する理解は深まり、血肉化されている。中央集権主義の組織思想は、自からの階級的利害を自覚したプロレタリアートの党の組織思想である。

「権力獲得のためにたたかうにあたって、プロレタリアートには組織のほかにどんな武器もない。ブルジョア世界の無政府的競争の支配によって分裂させられ、資本のための強制労働によって押しひしがれ、まったくの貧困と野蛮化と退化の『どん底』に絶え子投げおとされているプロレタリアートは、マルクス主義の諸原則による彼らの思想的統合が、幾百万の勤労者を一つの労働者階級に融合させる組織の物質的統一でうちかためられることによってのみ、不敗の勢力となることができるし、またかなければならないであろう。」（レーニン、『一歩前進、二歩後退』国民文庫P二九二）

我々にとって、中央集権主義の思想は「組織上いくたの部分的細部的な問題全体の解決方法を、原則的に規定する」（前掲書P五九）ものとして、党組織の基礎におくべき、基本的な思想なのである。

党内公開制の広範な適用に習熟するという問題について言えば、我々は一〇・二三攻撃以前においてはいまだ多くの不充分性を残していたと考えている。今日の我々の非合法組織・合法組織・獄中の間の文書連絡において検閲が強制され、かつ捜査、押収の危険が残されている中では、党内公開制の適用の習熟ということは死活的問題であり、我々の党的飛躍の決定的条件でもある。

「また規約が無益なのは、革命的活動がかなり少しもつねにそれに一定形をあたえることをゆるさないからだけではない。そうではない。定形をあたえることは必要であり、われわれは、可能性に応じて全活動に定形をあたえるよう努力しなければならない。また定形をあたえることはふつう考えられているよりもはるかに大きな範囲でゆるされるものである。だがそれは規約によって達成しうるものではなく、ただもっぱら（幾たびでもくりかえして言おう）党中央部への正確な報知によってのみ達成しうるものである。こうしてはじめて、それは現実の責任制および（党内での）公開制と結合した現実の定形性となるだろう。」

「そして、われわれが、この公開制を広範に適用することを習得したときにはじめて、われわれのあいだにあれこれの組織の機能の経験が実際につくりあげられるであろう、このような広範な多年の経験にもとづいてはじめて、紙上の規約でない規約をつくりあげることができるのである。」「レーニン『われわれの組織上の任務について一同志に与える手紙』全集⑥P二五一）

我々は、従来の会議を軸にした組織活動の中において、いまだ雑然とした仕事のやり方やサークル的手工業性を残していたし、このことは我々の秘密活動の欠陥をも結果していた。文書を軸とした党活動においては、各党員、活動参加者、党に所属したり、同調している諸グループがその指導を中央集権化することがより強く要求される。これらの人々がその指導を中央集権化しようと努力しない限り、強固な指導力をもった党中央を建設することは出来ないのである。また全党に対する報告の義務は各自の責任制を確立し、党に対する責任の地方分散化が一層強く要求されるであろう。しかし、党に対する責任を最大限に地方分散化することによってこそ党中央部の指導の革命的な中央集権化が実現されるのであるから、我々は当初の困難にめげず努力することによって、逆に我々が今日おかれている条件を党の飛躍的強化に結びつけることができるし、我々の活動を工業化することができる。さらに文書を軸とした党活動においては、公明正大さがより強く要求される。党内での公開制に耐えうるように組織されていなければならない。

②秘密活動上の若干の総括

以上を前おきとした上で、一〇・二三攻撃を許した我々の秘密活動の欠陥について、我々がこのように総括しているかということについて、以上述べたことと若干重復することになるが、簡単に述べておきたい。すでに『RG救対ニュース』誌上でも述べてきたように、我々の秘密活動の最大の欠陥は、我々の従来の党組織の運営の仕方が会議を中心としたものであり、文書連絡を中心としたものではなかったというところにあったと我々は考えている。様々の規律上の問題、技術上の問題が一つ一つ点検されなくてはならないし、革命的な組織、規律、秘密活動の技術を徹底的に鍛え上げるために、我々はいまだ多くのことをなさねばならないことを公然と認めなくてはならない。しかし、やはり我々が会議を中心にした党の運営を続けていたかぎりにおいては、政治警察の尾行からいもづる式に組織がつぎつぎとつかまれていくのを防ぐのは困難であったと言える。この問題は、党活動の基本的な問題であって、我々の組織と規律、秘密活動の技術自体を規定していたということができるのである。我々は一九七五年秋浜田同志の被逮捕を契機として、文書連絡への移行を追及していたが、党全体が文書を軸とした党活動を遂行するものとして、組織を変革しようとせず、党と支持者、党と党を支持するさまざまのグループとの間の連絡のみを文書で行おうとしていたため、充分に移行を果せずにいた。一九七六年四月末以来の政治警察との攻防において、我々はこのことを総括し、党全体を文書を軸とした党活動への移行させようとしていたが、その途上で一〇・二三の一斉検挙攻撃をうけたのである。文書を軸とした非合法の党活動を実現するということはそう容易なことではない。『RG救対ニュース』五号『政治警察との闘争――秘

緊急
狭山差別事件に対する最高裁の上告棄却決定を徹底して弾劾しブルジョアジーを追いつめよ！

るものとして、責任をもったかたちで、各党員、活動参加者、グループの活動の経験、そこでの内部闘争の経験にできるだけ定形が与えられて、党中央部への報告を報知が行われなくてはならない。この『赤報』発行は、指導の中央集権化を我々が最後まで押し進めていくための武器となるであろうし、「中央機関紙と中央委員会にむかって意見を述べる規則的な習慣」（前掲書P二四八）を我々が全党的につちかっていくことを可能にすることになるだろう。我々は闘争の教訓を一つ一つ定形化しつつあり、政治警察の手口の解明のための調査をも続けている。我々は、我々が一九七一年秋、政治局＝軍事委員会、RG＝政治軍隊を中核とした党建設を開始し、革命戦争を再開して以来の二〇余年間の党活動をしっかりと継承しながら進んでいる。我々は力に満ちて作業を進めていることを報告しておきたい。

密活動上の若干の教訓について』において我々が述べておいたように、このような活動への移行は旧来の我々の組織活動全体の根本的な変革につながる。とりかかってみれば すぐにわかることだが、まず全党を構成している党員、及び党を支持するさまざまなグループの組織活動に対する思想を変えてゆかねばならない。文書配布だけ自からの指導を中央集権化することによって党に対する責任の地方分散化についての自己の義務をはたすところの活動に他ならないことを実際に体得してゆかねばならない。次に文書を運搬する仕事、発信、受信する仕事、保管する仕事の専門化の問題がすぐに出てくる。これらの仕事の専門化はその他の組織活動の専門化をも促がす。そして専門化の実現は集中化を要求する。「しかし、他方からいえば、これらの小さい細片を全部一つにまとめるためにも、また運動の機能を細分しながらもこの運動そのものは細分しないようにするためにも、さらにこまかい機能の執行にあたる人々に自分の仕事の必要性と意義とにたいする信念――そういう信念がなければ彼らはけっして仕事をしないだろう――をいだかせるためにも、ほんとうにこうしたことのために、ほかならぬ話練を経た革命家の強固な組織が必要なのである。」（レーニン『何をなすべきか』国民文庫P一九六）結局、先にも述べたが文書を軸にした党活動への移行は指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化の実現をより強く要求する。党の地方的活動に従事する党員、党を支持するさまざまなグループがその指導を中央集権化するために、自らの党に対する責任の最大限の地方分散化をなしとげ、中央部にたいして責任を負うこと でも、党機構の大小いっさいの車輪の状態を中央部に熟知させる点でも、定期的かつ正確な報告を行わないならば、党の中央部は無力なものとならざるをえない。会議による党の運営の中では、かえってこれらの問題があいまいにされる。文書連絡を中心にした党活動においては、党中央部への正確な報知の義務が果たされないことによる党活動の停滞というかたちで、よりはっきりとあらわれる。「この責任の地方分散化は、革命的な中央集権化の必須条件であり、その欠くことのできない補正手段である」（レーニン『われわれの組織上の任務』について の一同志に与える手紙」全集⑥P二四八）という問題がより鮮明になってくる。だからまた、このような党活動を実現することの意義をしっかりと強調して全党を鍛えあげるべき党中央部の積極性が問われてくる。党に対する責任の地方分散化に応えうるところの革命的な指導の中央集権化が要求される。このような指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化が行われてこそ、秘密の機能の集中と運動のその他の機能の専門化も実現できる。そして、全国的政治新聞の発行は、指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化の実現のために、秘密の機能の集中と運動のその他の機能の専門化のためにも必須である。なぜなら、自然発生的な労働運動の中に明確な共産主義政党の任務を実践的に解決していくことと の関連でしか、組織活動の発展はありえないからである。

「党の結成は、――一定の新聞によってこの党をただちに代表させる仕事が組織されなければ――大体において単なるかけ声におわるであろう。中央機関紙によって統合されない経済闘争は、ロシアの全ブロレタリアートの階級闘争となることはできない。全党があらゆる政治問題について意見を述べ、闘争の個々の現われの方向を決定しなければ、政治闘争をおこなうことは不可能である。革命勢力の組織化と、それらの勢力の訓練と、革命的活動の技術の発展とは、これらすべての問題を中央機関紙で討議し、仕事の運営の一定の形態と規則を集団的につくりあげ、全党にたいする各党員の責任制を――中央機関紙を媒介として――確立することなしには不可能である。」（レーニン『われわれの当面の任務』全集④P三三四）

かってロシアにおいてレーニンはこのような認識の下に、『イスクラ』発行を準備していった。

❷情勢について

さて、我々の党内討議の成果は次第にこの『赤報』紙上において公表されていかなければならない。次に、今日の階級の相互関係及び革命的左翼の傾向に関して、我々の態度を述べておきたい。

九七五年九・二〇天皇訪米阻止闘争を前後して明らかに昂揚を開始した、プロレタリアート人民の階級闘争は、今日大衆的昂揚へと発展しつつある。五月六日の三重塚強制撤去は、ただちに三日間の実力闘争を呼びおこした。五月八日の東京都虎殺は、更に数倍のプロレタリアート人民の大衆的憤激を生み出した。この昂揚はますます広まり、ますます深まっていくであろう。国際的には米帝国主義と連社会帝国主義との対立が深まっており、帝国主義列強の争闘戦、世界分割戦が激化している。三大陸人民の民族解放闘争は依然として前進しており、帝国主義下の階級闘争もまた、今日再び国際的に昂揚期に入っている。日本階級闘争においては、一九五五年以降続いてきた議会における自民党多数支配が崩壊しようとしており、一つの過渡期が始まっている。この過渡期は、諸政治勢力の生死を賭けた激しいせめぎあいの中で進んでいる。国際、国内の階級情勢は明らかに激動している。このような国際、国内の階級の相互関係に対して、日本の革命的左翼はどのような政治態度をとっているだろうか。多くの諸君が革命的情勢について語り、「上層の危機」と「下層の危機」について述べている。しかし、革共同中核派の天皇制イデオロギーをテコとする日帝の統治形態のボナパルティズム的転換を進行に関する張ぼら、蜂起派の先行性ファシズム、プロ革派、革命通信派の天皇制ファシズムの主張に至るまで、さまざまのいろいろの違いはあれど通じているところの「上層の危機」の主張はあっまいであり、階級分析地に立ったものとはいえない。当然にもこれらの諸君の「下層の危機」の主張も同様である。特にプロ革派は、反スタマルクス主義を急進民主主義と混同している（実際、革労協や第四インターはそのように主張している）ばかりか、かつての赤軍派の前段階蜂起論がなしくずしファシズム論と結びついていたことを総括すべきであるにもかかわらず、なしくずしファシズムを天皇制ファシズムに言いかえ、前段階蜂起、前段階蜂起、臨時革命政府樹立を再びと主張し、建軍―ソビエト運動」を主張しているのは、一九六九年当時とは違って全く迫力がないとはいえ、真面目な態度であるとは思えない。この諸君がスターリンの再評価を唱えようとしようとする我々の知ったことではないが、プロ革派を筆頭にして、今日の革命的左翼の急進民主主義的体質は、何ら変革されていないと断定できる。結局これらの人々は反ファシズム（あるいは反ボナパルティズム）を唱えることによって、プロレタリアートの中に小プルジョア的な自然発生性をもちこみ、プルジョアジーとプロレタリアートの階級的利益が解しえないように対立している。これをファシズム（あるいはボナパルティズム）と評価することはできない。プロレタリアートの真の敵である帝国主義ブルジョアジーから、プロレタリアートの目をそらし、プルジョアジーと自衛隊、警察、検察、裁判所、「所要の官僚組織」とのむすびつき、ブルジョアジーと天皇―右翼との関係、ブルジョアジーと米帝との関係、農民の民族解放民主主義革命と結合して、帝国主義の侵略、反革命と対決し、ブルジョアジーを打ち倒して自らの経済的解放をかちとるべきプロレタリアートの任務は、ますます重大なものとなっている。しかし、そうであればあるだけに、「革命的階級の能力」を客観的条件にむすびつけるべき共産主義政党の役割が強調されなくてはならない。

「日和見主義は、合法主義によって育成された。一八八九―一九一四年の時期の労働者は、ブルジョア的合法性を利用しなければならなかった。だが、危機が単に危機のみについて語り、大衆の自然発生性に立ってのみ語ることによって、革命家の積極性を低めている人々、六〇年代後半から七一年に至るまでの階級闘争から何も学んでいない人々に対して、これらの人々は断固とした批判を集中すべきであろう。

「なぜなら、およそ革命的情勢があればかならず革命がおこるというわけのものではなく、ただ、つぎのような情勢からだけ、すなわち、右に列挙した客観的変化に主体的変化がむすびつくばあい、つまり旧来の政府を粉砕する（またはゆるがす）にたる強力を革命的大衆行動をおこす革命的階級の能力がむすびつくようなばあいにだけおこるものだからである。この旧来の政府は、これを『危機』させないかぎり、たとえ危機の時期であろうともけっして『たおれる』ものではない。」（レーニン『第二インタナショナルの崩壊』国民文庫P二七）

一九一五年、帝国主義戦争に直面してレーニンはこのように言った。

一定の（経済的ならびに政治的）危機」は、今日疑いもなく存在する。特に、在韓米軍撤退計画の進行に伴って、朝鮮南半部への日本帝国主義の侵略、反革命の強化がいよいよもって進み、帝国主義の暴力と反動の強化されていることをもたらしていたいくつかの条件が今日存在しなくなり、インフレーションと失業が増大している。これらの情勢の下で、我々は、「全国的政治新聞の『計画』が実行に移されなければならない。そしてそのためには、プロレタリアートの経済的政治的の役割について革命党が正しく把握し、プロレタリアートの前に明らかにしていく作業が必要であり、正しい資本主義批判に基づいた綱領の原則的部分の確立が必要である。また、非合法党建設のためにはマルクス・レーニン主義を復権させることが必要であるが、「四つの基本予盾」論をめぐる、マルクス・レーニン主義を復権させる作業の中にはレーニンの組織思想を復権させる作業が含まれていなければならず、レーニンの組織思想が正しい資本主義批判に裏づけられていることについて把握することが必要である。更に、非合法党建設それ自体にとって、例えば指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化のために、秘密の機能の集中と運動のその他の機能の専門化のために、全国的政治新聞が果たす役割が決定的であることについても確認すべきである。その他革命左派の主張に対して、我々はいくつかの指摘を行うことができる。

（前掲書P八六）

危機の時代には非合法組織が必要である。このことをロ先で認めるべきである。しかし、この問題では実行するのみであり、政治警察との闘争の中で、革命家の訓練が必要である。合法組織を保護しつつ、これらの人々をプロレタリアートは信用してはならない。我々はプロレタリアートの階級的利益を真に代表するために自らを鍛え上げ、非合法の共産主義的活動を創造しつつ徹底的な党派闘争をこの激動の中で闘っていかなければならないだろう。

さて、以上簡単に、今日の階級的相互関係における基本的左翼の傾向についてみてきた。階級闘争の昂揚は進んでいるが、革命的左翼の急進民主主義的体質は変革されていないことを、これらの人々は

第一インター一般規約前文の精神を貫けばよいことである。また、我々はこの作業がレーニンの組織思想を我々が継承していくための基礎作業となるものであることも主張してきた。我々はこのことについてほぼ五年間主張してきたわけだが、我々は今日、もう一段と我々の資本主義批判を深化させることができると考えており、この前進にもとづいて綱領の原則的部分を確立していくための我々の作業を前進させ、また革命的マルクス・レーニン主義の組織思想を継承する作業をも前進させて非合法党建設を進めていくことができると考えている。革命左派の主張は充分に展開されているわけではないが、革命左派の綱領的見地の誤りを基礎づけてお り革命左派の組織思想の限界を基礎づけている。

「解放の旗」三一号での彼らの主張をとりあげてこのことを示しておこう。

革命左派は次のように述べている。

「RG派の課題は、なぜ労働力と労働条件の分離が発生したのかなにに根源で労働力と労働条件の分離が発生したのか、そしてそれはどのように発生したのか、資本主義的生産がそれを拡大再生産しつつ、どのように社会主義革命の物質的条件を成熟するのかをもう一度再考することである。資本主義的生産がそれを拡大再生産する社会主義革命のための社会的勢力を生産するという正しい理解を堅持しつつ、資本蓄積（再生産）論が資本論理解の軸という考えを堅持しつつ、これらの問題を再考してみることである。」（P二九）

この箇所の前半部分については別の機会にくわく回答しよう。問題は後半部分である。このようなマルクスの資本蓄積論に対する理解は我々のものではなく、革命左派のものなのである。革命左派は『資本論』第一巻第二章単純再生産でマルクスが資本関係の再生産について述べている部分において資本家に対する労働者の経済的隷属が明らかにされていないと、『資本論』第一巻第二章剰余価値の資本への転化でマルクスが資本家と労働者との交換関係は「流通過程に属する仮象」であることを暴露し資本制的取得法則について明らかにしていることについても理解していない。革命左派は資本主義的生産が「所有と労働の分離」を「拡大再生産」という述べている。『解放の旗』三一号の文章からは、この人々は資本関係の再生産ということと「所有と労働の分離」ということとを同じ事柄であるかのように考えているようである。それは大きな誤り である。革命左派は以前から一貫して第三章資本制蓄積の一般的法則に関心があるのだが、第三章で結論的に述べられている資本制的蓄積の敵対的性格は、資本家への労働者の経済的隷属の把握の上に立ってのみ、本当に理解できるのである。まず『資本論』第一巻第二章の結論部分から引用しよう。

「かくして、資本制的生産過程は、それ自身の進行によって、労働力と労働条件との分離を再生産する。かくすることによってそれは労働者の搾取条件を再生産し、永遠化する。それは、たえず労働者をして生きるために労働力を売ることを余儀なくさせ、たえず資産をして致富のために労働力を買うことを得させる。資本家と労働者とを購買者および販売者として商品市場で対応させあうものはもはや偶然ではない。後者をたえず自分の労働力の売手として商品市場に投げかえし、彼らしんの生産物をたえず前者の購買手段に転化させるということは、過程そのものの筋書きである。事実上、労働者は、彼がじぶんを資本家に売るまえに資本に属している。彼の経済的隷属は、彼の自己販売の周期的更新や、彼の個人的雇主の変化や、労働の市場価格の動揺やによって、媒介されると同時に隠蔽されている。

だから資本制的生産過程は、関連において考察すれば、すなわち再生産過程としては、商品を生産するばかりでなく、剰余価値をも産するばかりでなく、剰余価値をも再生産する。一方には資本家を、他方には賃労働者を、生産し、再生産するのである。」

ここには、資本主義的生産様式における資本家と労働者との関係が経済的な支配・隷属関係であることが述べられている。

第一インター一般規約前文の「労働用具すなわち生活源泉の独占者への働く人の経済的服従が奴隷的形態、精神的退化、政治的従属の根底にあること

それゆえに、労働者階級の経済的解放が大目的であって、あらゆる政治運動は手段として、この目的に従属すべきものであること」

とされている命題は、この第一章の結論部分をふまえて述べられているのである。

革命左派は、資本関係の再生産について語りながらも、資本制的蓄積の一般的法則、敵対的性格と歴史的傾向とを混同している合法マルクス主義の伝統を引きついでおり、社会主義革命の物質的条件の形成にのみ注目し（このことについては我々は『亦報』一四一六号の川島君批判において、生産手段の集中と労働の社会化が資本制的外被と調和しえなくなることとして、『資本論』第一巻第二四章第七節の結論部分とエンゲルスの「社会的生産と資本主義的取得との矛盾の予告」の主張とが、同一であるかのごとくに述べている）、社会主義革命の執行者としてのプロレタリアートの経済的地位とその役割について革命党が系統的に明らかにしていない責任がないのであり、資本家に対する労働者の経済的隷属についてまったく指摘できていない。革命左派は『解放の旗』三一号において、プロレタリアート独裁をどのように準備するのかという課題を自らに設定したわけだが、今日のブルジョアジーとプロレタリアートの階級的な敵対関係が経済的な支配・隷属関係であり、ブルジョアジーがプロレタリアートに対する自らの経済的な支配を永続させるために国家権力を掌握し利用しているからこそプロレタリアートは、ブルジョアジーを打倒しブルジョア国家権力を粉砕しなければならの経済的解放を実現すべき社会革命を達成することができないのだ。したがってプロレタリアートはプロレタリアート独裁権力を樹立することによって、ブルジョアジーの反抗を粉砕しつつ、社会革命のテコとして、この国家権力を利用しなければならないのである。資本家に対する労働者の経済的隷属について しっかりと把握しなければならない。革命左派は、ブルジョアジーの階級の利益を代表していない政党は、プロレタリアートの根底に立脚しつつ、ブルジョアジーの根底にあるものを暴露しつつ、この国家権力を利用しなければならないのである。資本家に対する労働者の経済的隷属について しっかりと把握し労働者階級の経済的解放についてしっかりと把握していない政党は、プロレタリアートとブルジョアジーの階級の利益がどうして、またどのように和解しえないものであるかについて明らかにできないからだ、プロレタリアートの階級的利益を代表することはできず、プロレタリアート独裁を準備することはできないのである。

もう一言いわせてもらうならば革命左派の注目している第三章においては、資本の蓄積に照応して貧困が蓄積されること、ブルジョアジーの側における富の蓄積はプロレタリアートの側では同時に貧困・労働苦・奴隷状態・無智・野性化、および道徳的堕落・の蓄積である（『資本論』第一巻P六八一）ことが述べられている わけだが、このことを単に社会主義革命の物質的条件の形成、資本制的生産様式における生産力と生産関係の衝突のあらわれ（例えば恐慌として結果するところの）として理解するのではなくて、プロレタリアートの経済的地位とその役割についての革命党の系統的理解としてとらえることは、プロレタリアートの経済的隷属との関係で理解しなければならないのである。すなわち、労働用具すなわち生活源泉の独占者への働く人の経済的服従があらゆる形の隷属、あらゆる社会的悲惨、精神的退化、政治的従属の根底にある」のだということを共産主義政党はプロレタリアートにむかって明らかにし、プロレタリアートの経済的解放の大目的を示さなくてはならず、この大目的に従属させた政治運動をつくりあげなくてはならない。そうでない限り、革命左派はプロレタリアートの貧困の中に貧困のみを見いだすことになり、プロレタリアートの革命的能力を引き出すことができないのであり、当然の帰結として、プロレタリアート独裁権力を準備することはできず、また共産主義革命を準備することもできないのである。

更に「マルクスの蓄積論の復権」ということは関連しているとはいえまったく別の問題である。資本家と労働者との交換関係が流通過程に属する仮象であることは暴露されれば、例えば組合主義者との賃労働闘争はできないし、また資本制取得法則についてはっきりと把握していなければブルードン主義的な「剰余価値の奪盗」の主張や、資本家と賃労働者との関係を収奪・被収奪関係と見えるような傾向（最近これらの傾向は一定増大している）と闘争しどのような社会革命をプロレタリアートが実行しなくてはならないのかということについて革命党がプロレタリアートに正確な思想を示していくことはできないのである。例えば資本主義的商品生産を社会主義的な生産物生産の組織によっておきかえることについて。

革命左派の「所有と労働の分離の拡大再生産」という主張は、カウツキーの「持つ者と持たない者とのあいだの深淵は資本主義的生産様式の本質に根ざす恐慌によってさらにひろげられる」（エルフルト綱領）という主張と五十歩百歩である。革命左派は資本家と労働者の経済的支配・隷属関係を明らかにするかわりに「持つ者と持たない者とのあいだの深淵」の拡大再生産という見解をもち出して いるのであって、資本蓄積（すなわち資本関係の拡大再生産）を「所有と労働との分離の拡大再生産」に切りちらめ、労働者と労働実現条件の分離をこのものを資本関係と把えていることによって、両階級の関係を搾取●被搾取関係に解消するスターリン経済学を批判できていない。

革命左派に実際に要求されているのは、旧来の思想の根本がどのような誤った資本主義批判にもとずいているのかを明らかにすることである。そうすることによって、革命左派自身は革命的マルクス・レーニン主義を復権することはできない。プロレタリアートは独裁をどのように準備するのかという課題を自らに設定した革命左派が、その回答を得るためには革命左派の資本主義批判の誤りを根本的に総括することが必要である。

④ 革命左派の資本主義批判によってはレーニン『何をなすべきか』から学ぶことはできない。

次に革命左派の組織思想について述べていこう。革命左派は『解放の旗』三一号では「非合法党建設こそプロレタリアート独裁準備の カナメ」と主張し、レーニン『何をなすべきか』を紹介し、「我々は『何をなすべきか』から学んだことを表明し、「我々は『何をなすべきか』理解の誤りについて述べ、我々の『何をなすべきか』に対する把握について簡単に提起しよう。

（二）自然成長の「理論」の批判。あるいは運動における前衛の役割。自然成長性の『理論』は、日和見主義の理論であり、労働運動の自然成長性を拝跪する理論であり、労働者階級の党の指導的役割を事実上否定する理論である。

自然成長性拝跪の理論は、労働運動が革命的性格をもつことに断固として反対する。それは運動がいつたく別の方向をとることに反対する。それは運動が資本主義に『実行できない』『うけいれられる』要求の方向をひたすら進むことに同意する。それは徹頭徹尾、最小抵抗線 に同意する。自然成長性の理論は、労働組合主義のイデオロギーである。（中略）自然成長性の理論は運動内で自覚した分子のはたす役割を軽視する理論であり、「追随主義」のイデオロギーであり、あらゆる日和見主義の論理的基礎である。」（「レーニン主義の基礎」国民文庫P三〇〜三一）

このスターリンの解説はレーニン『何をなすべきか』の第二章大衆の自然発生性と社会民主主義意識性に大体照応している。しかし、レーニンの思想を「自然成長性の理論」の批判」というかの様に強調されているが、レーニンは社会民主主義者の任務は「自然発生性と闘争すること」であり、革命的社会民主主義者の意識のもとに労働運動を引きいれることにあるのだと述べて、問題をブルジョア・イデオロギーかそれとも社会主義的イデオロギーかとして提出している。スターリンは「資本主義の基礎」にたいする「前衛」とか「党が大衆を階級意識の水準に引き上げる」とか述べているが、レーニンが経済主義者の組合主義的政治を批判して社会民主主義的政治を提起したことについてふれていない。スターリンは「労働者の境遇につきものの困苦の克服を目的とする」ものであるが、まだこの境遇そのものを廃止しない、すなわち資本への労働の隷属を廃絶しないあれこれの方策を、国家に奉施させようとするすべての労働者の共通の志向」（P六八）として組合主義的政治を規定している。だからレーニンの社会民主主義的政治の主張は当然にも資本への労働の隷属を廃絶するための政治をとりつくるかという観点から提起されているのである。以上簡単にスターリンの解説とレーニン自身の主張を対比させてみた。スターリンの解説がレーニンの主張を正しく伝えていないことは明らかである。

このようなスターリンとレーニンとの違いは、資本主義的イデオロギーとプロレタリアートの階級的利益を代表する社会主義的イデオロギーとの違いである。スターリンは自然発生的な労働運動とは組合主義であり組合主義とはブルジョアジーによる労働者の思想的奴隷化であると述べている。スターリンの場合は、党の指導的役割「前衛」であるとしていうことが一般的に強調されているが、レーニンは社会民主主義者の任務は「自然発生性と闘争すること」であり、革命的社会民主主義者の意識のもとに労働運動を引きいれることであるのだと述べて、問題をブルジョア・イデオロギーかそれとも社会主義的イデオロギーかとして提出している。スターリンは「資本主義の基礎」にたいする「前衛」とか「党が大衆を階級意識の水準に引き上げる」とか述べているが、レーニンは自発

日本の警察の特徴とその情報収集活動

警察は、その背後に自衛隊という名の巨大な武装力をおき、法律の名のもとに労働者階級、被抑圧大衆に対する弾圧を正当化する司法機構、革命家を隔離・殺害する監獄に補充され、他の特別警察（海上保安庁、入国管理事務所、公安調査庁、消防庁等）を従えて、全治安機構の中核に位置している。ことは言うまでもない。警察は、一方では軍隊に近い武装力をもち他方では代用監獄をもち、平時における独立した治安機構としての体裁をもっている。

日本警察の人員は二万（一九七三年）であり、これは戦前最高時（一九四四年）の三倍である。その予算五五〇億（一九七三年）は一九六〇年の四倍である。その武装力は、戦前に比較してのみならず、一九六〇年代に飛躍的に強化されたことは衆知の事実だ。

日本の警察の第一の特徴は、その形式―官僚的な中央集権制にある。

日本の警察機構は、明治政府下で、パリ・コミューンが粉砕された直後のフランス警察機構を形式として模倣して作られた。戦後一九四八年に施行された新警察法によって自治警察の独立性を認めるというように変えられるのであるが、一九五一年、五二年、五四年の三度の改革によって再び中央集権的な国家警察へと再編されるのである。だから日本の警察は自治体警察の伝統はまったくもっていない。この中央集権制ゆえに六〇年代後半、七〇年代初頭の階級闘争に対応してきたのである。

警察の特権行使は、警察二万はいうまでもなく、海上保安庁などの特別警察を含む武装部隊の中核を握り、防衛庁の主要ポストも独占しており、公安調査庁、内閣調査室等の全情報機関を掌握している。

第二の特徴は、全警察の政治警察化である。この点でも戦前の行政警察、子防警察の伝統を引きついでいるのだが、公刊されている教科書（警備警察全書（立花書房）をみてみよう。

「警察は革命勢力をうち破る国民大衆の前衛であり、中核体としての役割をもつものでなければならない。」「それ（警察の目標）は暴力革命を主張する革命勢力を弱めることであり、彼らを一般国民から孤立させることである。…左翼の暴力者が平和とか自由とか平等とか口先でどんな言葉を並べたてていようとも実際は暴力で人間の自由も人格もふみにじる事実を国民大衆に知らせ、彼らの企てている際の目的はどこにあるかそしてその独裁政権樹立の目標などを暴露することである。暴力革命の不可避性と階級的本能から感知しているブルジョアジーは、プルジョアジー階級的な任務を何の粉飾もなく的確に警察に自覚させんとしている。」

たとえば、警察学校講師用の初級講義録（公安警察）では（ア）外勤警察官にとって警備情報活動は基本的任務の一つである。（イ）外勤警察官は、警察組織の最前の勤務で網の目のように張りめぐらされたすべての面で触角的な役割を果しているので期待される面もまた大きい。（ウ）受持責任を遂行するためには、受持内の警備情報および警備事象のすべてに関心をもち、積極的に情報活動を行なわなければならない。（エ）外勤警官の警備情報収集は原則として立番、見張警ら、巡回連絡等の基本的勤務において敏感に五感を働らかせることによって行なわれる。」といったことが述べられ、立番員張、警ら、巡回、急訊、職質、犯罪捜査立入調査、交通取締り、拾得物取扱い等において警備情報を収集するために各々どんな所に着眼すべきかが述べられている。

外勤警察官も、政治警察の触角的位置におかれ、その活動は点数制度、試験制度によって強制されている。

第二の特徴は警備公安警察を機構の中核としていることである。警備公安警察は、その活動の重要なものとしては、警察庁警備局長→管区警察局公安部長→府県警備課および公安課というルートで指揮され、県警本部長、警察署長の指揮と独自に、警察機構そのものなかに、さらに中央集権的な機構を作っている（これは戦前の特高の組織のかたと同じ）。その活動の内容は事実上、国会に対し裁判所にも秘匿されており、そして他の警察機構をこの機構のもとに従属させているのである。たとえば情報活動において完全にそうである、大規模なデモ、ストライキ等の警備活動においてもそうである。

では、それは何を目的に活動しているか。

「検挙は一つの手段にすぎない。実際の仕事は将来必ずくる日共や学組その他大衆団体の非合法化に備え、日夜警察内偵を強化し資料や情報を収集し、また各種の工作をすることが我々の仕事である。」（「柳瀬公安刑事の手記」）

「非常事態が発生した時は、平時の警察組織・機構・動務方法は全く改変されて一大統合警察力を発揮すべく警察は非常態勢をとる。この場合の行政・司法各作用は公安の維持という警察の大使命のもとに統合される。」（森本正一『公安警備警察論』）

彼らは常に立派に自らの目的を抑圧している。われわれはいつもと闘っているのだということをキモに命じておけばよい。どのようなかの、昭和四四年九月五日金沢地裁判決では「具体的な犯罪の発生後にその捜査のためになすもの（捜査情報活動）、具体的に犯罪または公安を害する事案が発生するそれぞれの場合にその予防鎮圧のために行なわれるもの（事件情報活動）、あるいは具体的に右事案発生のおそれはないが、公安の維持、犯罪の防、鎮圧のために関連する情報収集するもの（一般情報活動）などがある」と述べられている。

先の「手記」『公安警備警察論』に従えば、「一般情報活動」は明確な事態を想定しており、捜査情報活動、事件情報活動はこの一般情報活動に従属するもの、その手段であることがわかる。

この「一般情報活動」には何が含まれるか。

「(1)共産主義革命を企画する左翼勢力の動向（左翼団体の組織機構、規約、綱領、指令、指導員、国際連帯運動、実践運動等）

(2)大衆闘争組織と大衆団体の動向（大衆闘争の組織と大衆団体の参加状況、運動方針、指導部の指導者の性格、実践活動、大衆団体の組織、幹部、左翼政党との関係、活動方標等）

(3)右翼団体およびそれに同調する暴力主義団体の動向（略）

(4)労働組合および労働運動の動向（労働組合の組織系統、規約、協約、政党との関係、役職員、闘争経歴、活動条件、関係団体、労働条件、経営者、事業所の地理的条件、資本系統）

(5)在日朝鮮人の革命的組織と対抗運動の動向（北朝鮮の対日工作、在日朝鮮人の居住分布、組織の状況、指導者、活動分子日共との交渉等）

(6)対日諜報に関する在留外国人の組織と動向（対日諜報、諜略工作の危険性ある組織の実態とその摘点についての動向等）

（『警備警察全書』）

これらは、警視庁でいえば、公安部の総務、第一～第四の各課、外事第一、第二課というように区分されたスペースによってなされている。

次にその具体的方法をみよう。

「(1)視察内偵　集会・デモ・その他の行事、団体交渉、その他の争議の状況を視察する場合や組合本部、団体事務所等を視察する場合にそこを一つの場として情報を収集する場合である。これは情報収集として最も一般的な方法である。

(2)聞込み　聞込みについては、ある特定の人や場所につき行なう場合と特定の目標なしになんらかの資料をつかむために行う場合とがある。またその方法として直接対象とする人や場所について行う場合と第三者を通じ間接的に行う場合とがある。聞込みの仕方については、相手により異った方法をとるのは当然のことであり、また捜査情報、事件情報の場合は問題は少いが一般情報の場合は十分注意する必要がある。特定の目的をもち特定の人を対象に聞込みをする場合には相手の社会的地位、人柄、警察への協力の程度、その他の条件をよく考え、また面接の技術としてとりあげられる人間関係を十分に念頭においておく必要がある。

(3)張込み　情報収集としての張込みは特定の事件に関連のある容疑者を発見する等のためにその立廻り先や重要参考人の関連性をつかむために行うものであるが、これは隠密にする必要がある。所の地理的条件、資本系統）

(5)在日朝鮮人の革命的組織と対抗運動の動向（北朝鮮の対日工作、在日朝鮮人の居住分布、組織の状況、指導者、活動分子日共との交渉等）

(6)対日諜報に関する在留外国人の組織と動向（対日諜報、諜略工作の危険性ある組織の実態とその摘点についての動向等）

（『警備警察全書』）

これらは、警視庁でいえば、公安部の総務、第一～第四の各課、外事第一、第二課というように区分されたスペースによってなされている。

次にその具体的方法をみよう。

「(1)視察内偵　集会・デモ・その他の行事、団体交渉、その他の争議の状況を視察する場合や組合本部、団体事務所等を視察する場合にそこを一つの場として情報を収集する場合である。これは情報収集として最も一般的な方法である。

(2)聞込み　聞込みについては、ある特定の人や場所につき行なう場合と特定の目標なしになんらかの資料をつかむために行う場合とがある。またその方法として直接対象とする人や場所について行う場合と第三者を通じ間接的に行う場合とがある。聞込みの仕方については、相手により異った方法をとるのは当然のことであり、また捜査情報、事件情報の場合は問題は少いが一般情報の場合は十分注意する必要がある。特定の目的をもち特定の人を対象に聞込みをする場合には相手の社会的地位、人柄、警察への協力の程度、その他の条件をよく考え、また面接の技術としてとりあげられる人間関係を十分に念頭においておく必要がある。

(3)張込み　情報収集としての張込みは特定の事件に関連のある容疑者を発見する等のためにその立廻り先や重要参考人の関連性をつかむために行うものであるが、これは隠密にする必要がある。

もちろん、住居侵入、窃盗、開封、盗聴、スリ等の非合法の方法もあることは言うまでもない。

「施錠をしてある家屋に入る場合、或いは鍵の鍵の開け方、ということも教えておられるそうです。封をしてある書類をぬきとるため糊を溶かして開きまたもとに戻すというようなこと……また郵便集配人を抱き込んで信書を見ることを教わったという報告もうけております。」（名古屋市警察本部長の証言）

政治警察の活動の方法は現在もの基本において何ら変化していない。ただその機動性が高められ技術が新しく開発される程度のものである。だとすれば、われわれはその基本をおさえ、それに対する対策を検討し、定期的に点検を行い、そして出来るだけ定型化された形で定期的にそれを報告していくことが必要である。以上はこれらのための一資料である。

政治警察との闘争に万能薬はなく、一人一人の経験が全党の経験となることによってのみ、一人一人がその経験を党の経験、全プロレタリアート・被抑圧大衆の経験とする努力をはらってのみ、われわれの政治警察との闘争の能力は高められるのである。

（前頁十段より）

ンの相違は、結局社会民主主義者の意識性の内容についての把握の違いであり、両者の資本主義批判の相違、プロレタリアートの経済的地位とその役割についての把握の相違にもとずいている。スターリンの資本主義批判が、例えば「無政府主義が社会主義か」に見られるように、資本家による労働者の搾取に対する批判に中心がおかれていることは我々が『赤報』五号以来述べてきたことであるが、搾取に対する批判という観点には、「……」（同前）

他には、面接、投入、捜索、任意出頭・同行、逮捕、取調べがあるわけである。長々と引用したが、それは、これら月念に検討すればわれわれの対策も一定程度整理しうると考えたからである。自然発生的な労働運動がゆきつかざるをえないところの組合主義への志向と真に闘争することはできない。もちろん、スターリンは資本家と労働者との交換関係が流通過程に属する仮象であることも暴露できていないからであり、やはり組合主義と闘争することはできないのである。これに対してレーニンの場合は「何をなすべきか」の次のような部分にも見られるところの、プロレタリアートの経済的地位とその役割に関する正しい把握があったのである。

「経済的利益が決定的な役割を演ずるからといって、したがって、経済闘争（『職業的闘争』）が第一義的な意義をもつという結論には、けっして、ならない。なぜならば諸階級がもっとも本質的な「決定的な」利益は、一般に根本的な政治的改革によってはじめて満足させることができるし、とくにプロレタリアートの基本的な経済的利益は、プルジョアジーの独裁をプロレタリアートの独裁でおき代えることによってのみ、はじめて満足させることができるからである。」（上巻四）「社会民主主義派は、労働販売の有利な条件を獲得するための労働者階級の闘争を指導するだけでなく、また、無産者が食料に身売りしなければならないような社会制度をなくすための闘争をもも指導する。社会民主主義派は、ひとりその当該の企業家集団にたいしてではなくて、現代社会のすべての階級にたいして、組織された政治権力としての国家にたいして、労働者階級を代表するのである。これからして明らかなことは、社会民主主義者は経済闘争にとどまることができないばかりか、経済的暴露の組織が彼らの主要な活動であるような状態をあるがままにしておくことができない。われわれは、労働者階級の政治的教育に、その政治的意識を発達させるために、積極的にとりかからなければならない。」（P八八）

ここには、レーニンの正しい資本主義批判があり、プロレタリアートの経済的地位とその任務に関する理解があることは明らかであろう。レーニンの資本主義批判の具体的内容は、例えば「九〇」年のロシア社会民主労働党綱領草案に示されているが、ここでは述べない。しかし、レーニンがプロレタリアートの経済的解放が大目的であること、そのためにはプロレタリアート独裁権力の樹立が義務的であることについてしっかりと把握していること、この立場にもとづいて労働者階級の政治的意識を発達させることについて語り、社会民主主義的政治と自主的にくりあげることについて語っていることは明瞭である。

革命左派の諸君は「解放の旗」三二号において「ソ連修正主義の正体」が『資本論』を剰余価値論のみに歪小化する傾向があるとして批判し、資本蓄積論について強調している。しかし、革命左派の主張は、社会主義革命の物質的条件の形成にのみ注目し、社会主義革命の執行者としてのプロレタリアートの経済的地位とその役割についての意識をプロレタリアートの経済的地位とその役割についてのみ注目しているものでは全くなかった。その結果、革命左派は「解放の旗」二〇号におけるスターリンの組織思想への全面的な依拠を問ら絡搭することなく、「非合法党建設」そプロレタリアート独裁革命でなくてはならないことを把握した上で、なおかつプロレタリアートの独裁をもこの革命の中で同時に準備することをめざして提起されている。またレーニンのこの提起は一つの組織計画であり、党の型を規定したものであり、かつ、当時のロシア社会民主主義者の思想的統合の課題に答えたものであることが明らかである。革命左派は、自らの資本主義批判の誤りを総括しないかぎり、レーニンの『何をなすべきか』から学ぶことはできないのである。

⑤ おわりに　全国的政治新聞の「計画」について

以上、我々は革命左派の資本主義批判の誤りについて明らかにしそれがスターリンの組織思想の未克服を結果していることを明らかにしてきた。「解放の旗」三二号での革命左派の主張は路線転換の一里塚であって、この諸君が今後どのように進むかを我々は注目しなければならない。革命左派がマルクス・レーニン主義の復権を叫ぶことは正しいが、問題はその内容である。革命左派はいまだスターリン主義の枠内にあり、革命的マルクス・レーニン主義に到達していない。我々は、我々がどのように革命的マルクス・レーニン主義の復権を進めようとしているかについて、革命左派の批判を通して提起したつもりである。我々は一〇・二三総括を一歩一歩押し進めながら前進していくであろう。我々はこの論文の最初で、我々が一九七一年政治局「軍事委員会」設を開始し、革命戦争を再開して以来の五年間の党活動をしっかりと継承しながら、かつてロシアにおいてレーニンが主張したような意味での全国的政治新聞の「計画」から学ぶことを課題としていることについてのべた。レーニンの全国的政治新聞の「計画」は、プレタリアートの経済的地位とその役割についての意識をプロレタリアートの意識に注入し、社会民主主義政党の任務をふまえて提起されており、ツアーリ専制下のロシアの革命が当面民主共和制を要求するところのブルジョア民主主義革命でなくてはならないことを把握し、革命戦争を再開して以来の五年間の党活動をしっかりと継承しながら、かつてロシアにおいてレーニンが主張したような意味での全国的政治新聞の「計画」から学ぶことを課題としていることについてのべた。レーニンの全国的政治新聞の「計画」は、プレタリアートの経済的地位とその役割についての意識をプロレタリアートの意識に注入し、社会民主主義政党の任務をふまえて提起されており、ツアーリ専制下のロシアの革命が当面民主共和制を要求するところのブルジョア民主主義革命でなくてはならないことを把握した上で、なおかつプロレタリアートの独裁をもこの革命の中で同時に準備することをめざして提起されている。またレーニンのこの提起は一つの組織計画であり、党の型を規定したものであり、かつ、当時のロシア社会民主主義者の思想的統合の課題に答えたものであった。このようなレーニンの主張を、我々が今日の日本階級闘争の条件に即してどのように継承するかについてくわしく明らかにするためには、別途まとまった論文が必要である。しかし、これまでに我々が革命左派の批判を通して述べてきたことだけからでも、今日の帝国主義下の階級の相互関係の中で非合法党建設を進め、共産主義革命にむかって進み、プルジョアジーを打倒し、プロレタリアート独裁を準備すべき我々の事業が、労働者階級の階級的政治的意識を高め、共産主義的政治的意識を我々が自主的につくり上げていくことと固く結びついており、全国的政治新聞の「計画」の達成と結びついていることは示されていると考える。

「もし、労動者が、専横・抑圧・暴力と盗用行為のありとあらゆる事例――この事例がどの階級に関係するものであれ――に反応する習慣を、しかも、知識のどの見地からでもなく、まさに社会民主主義的な見地から反応する習慣を得ていない限り、労働者階級の意識は真に政治的な意識ではありえない。もし、労働者が、具体的なしかも絶対無眉の（切実な）政治的事実や事件にもとづいて、他のそれぞれの社会階級の知的、精神的・政治的生活のいっさいの現れを観察することをなげなければならない、――また住民のすべての階級、層、集団の活動と生活のすべての側面の唯物論的分析と唯物論的評価とを実地に応用することをまなばなければならない。労働者大衆の意識は真に階級的な意識ではありえない。労働者階級の意識や観察力と意識をもっぱら、でないまでも主として、この階級自身にむけさせるような人は、社会民主主義者ではない。なぜなら、労働者階級の自己認識は、現代社会のすべての階級の相互関係

（六面九段へつづく）

マルクスの蓄積論の復権と宇野理論の批判（上）

目次

一、『資本論』の単純再生産について
二、『資本論』の拡大再生産について
〈註〉『流通過程に属する仮象』についての旭の誤った解釈について
（以上本号）
三、宇野の蓄積論の問題点
四、宇野の階級に対する思想への批判
五、『資本論』第七篇蓄積論研究の意義
六、『共産主義』十四号旭論文批判

はじめに

この論文は、『序章』十四号から十六号に連載された、宇野『価値論』批判」に『共産主義』十四・十五号の「宇野経済学批判」を加えて単行本として出版する計画の一環として昨年春に準備されていた草稿を、獄中同志達の討論によって、印刷出来るところまで仕上げたものである。単行本出版に先立ちここに発表、読者諸君の研究を要請したい。

草稿が準備されたいきさつは、『共産主義』十四号の旭論文がマルクスの蓄積論の内容を正しく復権しておらず、従ってプロレタリアートの経済的地位をその役割についてのマルクス・レーニン主義の見解を復権することに失敗していることが今日のわれわれにとって明確になったことによるものである。12・18プンド時代のわれわれは蓄積論に関しては旭論文の内容に基本的に依拠していたのであって、この論文の準備過程は同時にわれわれ自身の過去の見解に対する総括としての意味をもっている。

次に、この論ではわれわれが綱領の原則的部分の内容の意志統一を固めてゆく際に不可欠のものである。われわれはこの論文を綱領問題をめぐる国際的党派闘争の武器として活用しなければならない（われわれはすでに『RG救対ニュース』五号で日共革命左派の諸君との論争を開始している。

さらにこの論では、われわれが今日、レーニンの組織思想に学びマルクス・レーニン主義に依拠した非合法党を建設してゆく際に、諸ループを有機的に統合してゆく上で大きな意義をもっている。何故なら、レーニンの組織思想はプロレタリアートの経済的地位とその役割についてのマルクス主義の理論をその土台としており、後者について正しい把握をすることなしにはレーニンの組織思想をも学びとることは出来ないからである。

草稿が準備されたいきさつは、『共産主義』十四号の旭論文がマルクスの蓄積論の内容を正しく復権しておらず、従ってプロレタリアートの経済的地位をその役割についてのマルクス・レーニン主義の見解を復権することに失敗していることが今日のわれわれにとって明確になったことによるものである。12・18プンド時代のわれわれは蓄積論に関しては旭論文の内容に基本的に依拠していたのであって、この論文の準備過程は同時にわれわれ自身の過去の見解に対する総括としての意味をもっている。

次に、この論ではわれわれが綱領の原則的部分の内容の意志統一を固めてゆく際に不可欠のものである。われわれはこの論文を綱領問題をめぐる国際的党派闘争の武器として活用しなければならない（われわれはすでに『RG救対ニュース』五号で日共革命左派の諸君との論争を開始している。

さらにこの論では、われわれが今日、レーニンの組織思想に学びマルクス・レーニン主義に依拠した非合法党を建設してゆく際に、諸ループを有機的に統合してゆく上で大きな意義をもっている。何故なら、レーニンの組織思想はプロレタリアートの経済的地位とその役割についてのマルクス主義の理論をその土台としており、後者について正しい把握をすることなしにはレーニンの組織思想をも学びとることは出来ないからである。

一、『資本論』の単純再生産について

マルクスは第二十二章で資本の蓄積過程を、まず単純再生産の過程として考察している。そこでは資本家には新たに生産された剰余価値を再生産のために投下しないことが仮定されている。

この資本の蓄積過程は、第四章貨幣の資本への転化から、この第二十二章直前までの部分で述べられた事柄が単にくり返されるにすぎないのであるが、「直接的生産過程がくり返されるためには当然にも、それが流通過程によって媒介されねばならない。さらにまたそのくり返しが、資本の蓄積を具体的に意味する場合には、生産された剰余価値が、どのように分配されるかということも問題になってくる。だが、ここでは、流通過程における資本の転態は価値通りに行なわれるものとされ、また総剰余価値は資本家によって取得されるものとみなされている。）ここでは、このくり返しが資本家と労働者との関係にもたらす新たな性格が分析されている。

まず資本家の可変資本が過程の反復によってもつようになる新たな性格が考察される。可変資本は資本家と労働者との間の労働力の売買を通じてなされるので、可変資本は、第一に資本家自身が元本から前払いされた価値に見え、第二にそれは労賃の形態で支払われるので、なされた労働に対する支払いに見える。しかし生産過程をその継続においてみれば、労働者が支払われるのは、すでに彼の労働力が働いてそれ自身の価値及び剰余価値を商品に実現させたあとであるから労働者が労賃の形態で受けとる元本は、彼が受けとる前に生産されたものであることが知れる。そして、労働者が現在の労働によって生産手段の一部分を生産物に転形している間に、彼の過去の生産物が貨幣に再転形されているわけだから、前払いのように見えるのは貨幣形態によって生みだされる幻想であることがわかる。個々の資本家と個々の労働者との代わりに資本家階級と労働者階級とを考察すれば、貨幣形態によって生みだされる幻想は消滅する。そこで行なわれている事態は資本家階級が労働者階級によって生産され資本家階級によって取得される生産物の一部分を受けとりうる手形をたえず貨幣形態で労働者階級に交付し、労働者階級がこの手形と交換に労働者階級が生産した生産物のうち彼じしんの手に帰すべき部分を受けとっているということなのである。

こうして資本家の手にある可変資本は、労働者が、彼の自己維持および再生産に要する・そして彼があらゆる社会体制のもとで常にみずから生産しなければならぬ・生活手段の元本または労働元本の、特殊的な歴史的形態形態である。そこで行なわれている事態は資本家階級が労働者階級によって生産され資本家階級によって取得される手形物の一部分を受けとりうる手形をたえず貨幣形態で労働者階級に交付し、労働者階級がこの手形と交換に労働者階級が生産した生産物のうち彼じしんの手に帰すべき部分を受けとっているということなのである。

こうして資本家の手にある可変資本は、労働者が、彼の自己維持および再生産に要する・そして彼があらゆる社会体制のもとで常にみずから生産しなければならぬ・生活手段の元本または労働元本の、特殊的な歴史的形態形態である。そこで行なわれている事態は資本家階級が労働者階級によって生産され資本家階級によって取得される手形物の一部分を受けとりうる手形をたえず貨幣形態で労働者階級に交付し、労働者階級がこの手形と交換に労働者階級が生産した生産物のうち彼じしんの手に帰すべき部分を受けとっているということなのである。

「もろもろの経済的社会構造を――たとえば奴隷制の社会を賃労働――とえば奴隷制の社会を賃労働の社会から――区別するものは、この剰余労働が直接的生産者・労働者からしぼり取られる形態に他ならない」（『資本論』(1)二五頁）ということについてすでに明らかにしていたマルクスは、労働者が彼自身の労働元本を彼の過去の労働元本と交換する形態をとるか否かを問わず、物質化、となる」（『資本論』(1)五九八頁）とマルクスは述べている。

次にマルクスは、「労働生産物と労働そのものとの分離、客体的な労働諸条件と主体的な労働力との分離が、資本制的生産過程の事実的に与えられた基礎であり、出発点であった」（『資本論』(1)五九八頁）ことを確認し、ついで、「しかるに、はじめに出発点にすぎなかったものが、過程の単なる継続――単純再生産――に媒介されて、資本制的生産の独自な成果として絶えず新たに生産され、永続化される」（『資本論』(1)五九八頁）ということを指摘している。

というのは、資本の生産過程における労働者が労働は、過程にいる間に彼じしんから疎外され資本家に取得されているから、それは生産過程で資本家の生産手段に吸収されることによって資本家の商品を生産し、資本の価値を増殖するのである。だから労働者はその労働によって、自分に外的な、自分を支配し搾取する力としての資本を生産し、資本家はまた労働者の生産手段とは切りはなされた単なる価値創造力として生産するのである。

この過程を労働者の側からみれば、労働者は資本の下で生産的消費に従事し、他方生産過程の外では個人的消費によって彼の生活機能を行う。前者の過程において労働者が資本家に属していることは明らかであるが、後者の過程では資本家とは無縁な自由な過程のようにみえるが、実は、後者の過程では資本家は自由な労働者を搾取するために当面の資本家と個々の労働者とは単なる継続または単純再生産によって、長かれ短かれの期間の後には、どの資本も必然的に、蓄積された資本または資本化された剰余価値に転化される。資本は、それが生産過程にはいった時には、その交用者がみずから働いてえた財産だったとしても、早晩、等価なしに取得された価値、または他人の不払労働の、貨幣形態をとるか否かを問わず、物質化、となる」（『資本論』(1)五九八頁）とマルクスは述べている。

次にマルクスは、「労働生産物と労働そのものとの分離、客体的な労働諸条件と主体的な労働力との処分権を資本家に売り渡し、将来の彼の労働元本ばかりか剰余価値をも資本の生産物として生産しなければならないということの資本家と労働者の間の関係をなしている経済的諸形態をここでとき明かすことによって資本家階級と労働者階級との階級関係の内実の暴露に手をつけている。

さて、過程の反復が可変資本に与える新たな性格を分析した後にマルクスは、単純再生産が総資本に与える諸変化について考察している。まずマルクスは資本家が他人の不払労働とは関係のない本源的資本を持っていると仮定し、それを投資して単純再生産を行うものと想定している。

例えば一千万円を投資し、二百万円の剰余価値が年々生産されるものとし、資本家がこの二百万円を個人的消費にあてるとすれば、資本家は五年間で最初に投資した一千万円と等しい価値を個人的消費料によって消費したことになる。資本家は依然として本源的資本を同額の資本をもって単純再生産を継続することが出来るが、しかし、五年後には、「この資本の価値は、もはや、彼によって無償で取得された剰余価値の総額を代表するにすぎない。彼の旧資本の価値は、もはやみじんも存続しない。だから、およそ蓄積なるものを全く度外視しても、生産過程が

との間の等価物の交換ということは、両階級の間の関係を示すものではなくなり、両階級の関係の内実からすれば、等価物の交換、つまり資本家と労働者との交換関係は、流通過程に属する仮象と、なること。こうして資本家と労働者との間の商品関係の内実は、労働力の売買によって破かれ、かつ隠されていされていることが明らかになるのである。

ところがこの売買がくり返される単純再生産では資本家の本源的資本が不払労働の体化物になることが示された。そしてそこでは個々の資本家と個々の労働者でなく資本家階級と労働者階級を考察し資本制的生産過程をその流れとその社会的範囲において考察することによって、マルクスは労働者階級の資本家階級に対する経済的従属を明らかにした。そして拡大再生産のところでは個々の資本家と個々の労働者との間の労働力の売買に則して問題をたて、資本家の本源的資本と労働力との交換から出発して資本の蓄積において、追加資本と労働力とが交換される際には商品生産の取得法則が資本制的取得法則に転変することを示したのである。

単純再生産における個々の資本家と個々の労働者の間の取り引きは、それ自身を考察することによっては資本制的取得法則を暴露することが出来なかった。何故なら、労働者が労働力と交換に受けとる貨幣が、過去の自らの労働生産物の一部の転形されたものであるということを示し、また総資本が不払労働の物質化となるということを明らかにするためには、資本家階級と労働者階級とを考察せねばならなかったのであり、このような見地は、個々の資本家と個々の労働者との関係に商品生産の基準を適用することにはならないからである。

個々の資本家と個々の労働者との関係を、商品生産独自の経済的諸法則の見地から判断するためには「交換行為を、それに先行する交換行為ならびにそれを継起する交換行為とのあらゆる関連の外でそれ自体として考察されねばならない。」（『資本論』(1)六一五頁）ものである以上、この課題を満足させるためには、単純再生産の考察ではなくて拡大再生産の考察が必要だったのである。

こうして個々の資本家と個々の労働者との間の交換は、その貨幣の資本への本源的転化としては商品生産の法則とげんみつに一致して行なわれることによって、先に引用しておいた、(1)、(2)、(3)の結果を生みだすのであるが、この過程がくり返される単純再生産を分析するところでは、資本家階級と労働者階級の関連を明らかにすることによって、(1)、(2)、(3)の結果がその性格を変えてしまうことが示された。そして拡大再生産における追加資本と労働力との交換を分析するところで、商品生産の取得法則の資本制的取得法則への転変が立証されているのである。拡大再生産の分析によって発見された資本制的取得法則は、当然にも単純再生産の場合にも貫徹している。ただその場合にはこの法則が明示的には自己を示していないということにすぎない。

資本制的生産の歴史的端緒をなす商品生産の時代においては、私的所有権は商品生産の法則にもとづき、生産物は生産者に属し、価物としがの交換される。この所有権は資本主義時代に入ってもなお有効であるが、そこでは社会的富とのの交換は例外的となり、資本家と労働者との交換はおこなべて、資本制的取得法則にもとずくものとなる。なぜなら、「単純再生産の場合でさえも、すべての投下資本が、本源的にはどうして獲得されたかを問わず、蓄積された資本の再転化された剰余価値に転化する。だが生産の流れにおいては、総じて、およそ本源的投下資本は、直接に蓄積され資本、すなわち資本に再転化された剰余価値または資本化された剰余価値に転化する。だが生産の流れにおいて自身により商品として自由に売られやすい不可避となる。だがまた、その時から初めて、商品生産が一般化され典型的生産形態となる。その時から初めて、各生産物が最初から販売のため生産され、すべての生産された富が流通を通過する。賃労働がその基礎となる時に初めて、商品生産が社会に自己を強制する。だが、またその時に初めて、商品生産がその一切の限界と可能を現わす。賃労働の介入は商品生産を不純化すると語ることは、商品生産は純化されたくなければ発展してはならぬ、と語ることに等しい。商品生産がそれ自身の内在的法則に従って資本制的生産に発達するのと同じ程度で、商品生産の所有法則が資本制的取得の法則に転変する。」（『資本論』(1)六一六頁）

つまり、商品生産が、資本制的商品生産に発展してしまえば、もはや資本家の本源的資本と労働力との交換は例外的となり、資本家と労働者との交換はおこなべて、資本制的取得法則にもとずくものとなる。なぜなら、「単純再生産の場合でさえも、すべての投下資本が、本源的にはどうして獲得されたかを問わず、蓄積された資本の再転化された剰余価値に転化する。だが生産の流れにおいては、総じて、およそ本源的投下資本は、直接に蓄積され資本、すなわち資本に再転化された剰余価値または資本化された剰余価値に転化する。だが生産の流れにおいて自身により商品として自由に売られやすい不可避となる。だがまた、その時から初めて、商品生産が一般化され典型的生産形態となる。その時から初めて、各生産物が最初から販売のため生産され、すべての生産された富が流通を通過する。賃労働がその基礎となる時に初めて、商品生産が社会に自己を強制する。だが、またその時に初めて、商品生産がその一切の限界と可能を現わす。賃労働の介入は商品生産を不純化すると語ることは、商品生産は純化されたくなければ発展してはならぬ、と語ることに等しい。商品生産がそれ自身の内在的法則に従って資本制的生産に発達するのと同じ程度で、商品生産の所有法則が資本制的取得の法則に転変する。」（『資本論』(1)六一六頁）

つまり、商品生産が、資本制的商品生産に発展してしまえば、もはや資本家の本源的資本と労働力との交換は例外的となり、資本家と労働者との交換はおこなべて、資本制的取得法則にもとずくものとなる。なぜなら、「単純再生産の場合でさえも、すべての投下資本が、本源的にはどうして獲得されたかを問わず、蓄積された資本の再転化された剰余価値に転化する。だが生産の流れにおいては、総じて、およそ本源的投下資本は、直接に蓄積され資本、すなわち資本に再転化された剰余価値または資本化された剰余価値に転化する。だが生産の流れにおいて自身により商品として自由に売られやすい不可避となる。だがまた、その時から初めて、商品生産が一般化され典型的生産形態となる。その時から初めて、各生産物が最初から販売のため生産され、すべての生産された富が流通を通過する。賃労働がその基礎となる時に初めて、商品生産が社会に自己を強制する。だが、またその時に初めて、商品生産がその一切の限界と可能を現わす。賃労働の介入は商品生産を不純化すると語ることは、商品生産は純化されたくなければ発展してはなら

〈註〉『流通過程に属する仮象』についての旭の誤った解釈

「共産主義」十四号の旭論文は榎原論文と相互に参照されるべきものとして両者の一定の討論をふまえて書かれたものであった。したがって、われわれがここで資本の蓄積過程についての今日のわれわれの見解を述べる際に、旭論文の誤りについて明らかにしておく事が必要である。というのは、旭論文で展開された蓄積論は同時に過程によって明らかにしている、ということにあった。この政治的結論を導くものとなった旭の「直接的生産過程」についての把握は、対象化された労働による生きた労働の支配としての労働力商品化論をもっていたからである。

旭論文の提起した政治的結論は「労働者階級の私有財産の廃止をめざしての階級闘争を、資本の生産過程自身がまさに労働者階級を強制しているものであること」（「共産主義」十四号一六八頁）といった叙述からも明らかなようにプロレタリアートは資本の生産過程によって闘うことを強制されている。

プロレタリアートは資本の生産過程を自己の支配のもとに組織する。

この独自の「直接的生産過程」に対する見解によって批判しているのである。

だが「直接的生産過程」を対象化された労働による生きた労働の支配とする見解は、むしろ資本の蓄積過程以前に階級関係の内実を説くことになり、マルクスが資本の蓄積過程を分析することによって、資本家と賃労働者の階級関係の秘密をときあかしていったことの意義について気づいていない。資本の直接的生産過程に対象化された労働による生きた労働の支配を発見した旭は、マルクスの資本の蓄積過程についての理論を正しく学びとることに失敗しているといえる。というのは旭がすでに蓄積論の前提としてしまったものをマルクスは蓄積論でとりあげているのだから。そして旭は、この失敗によって、資本制的蓄積の一般的法則を正しく把握することにも失敗し、そこにプロレタリアートが闘争を強制されている一面のみを見、その反作用を見抜くことができず、そうすることによって、旭は、プロレタリアートの党による党派闘争の重要性について無関心にならざるをえないのである。

とまれ旭論文の内容上の検討に移ろう。

旭はまず宇野の「労働力の商品化」論を批判することをつうじて「労働者が自己の労働力を売買せざるを得ないような関係は、資本の蓄積が作る」（同書一七〇頁）という命題を打ち立てる。これは資本・賃労働関係は資本の蓄積がつくる、という同義反復的な命題にすぎないのだが、さしあたってこの変な命題をそのままにして旭の主張を聞くことにしよう。

旭は、この命題から出発して、資本家と労働者との間の労働力の売買が、単なる商品交換関係ではないことを、論証しようとしている。

「では、なぜ宇野の云うごとく生活手段—労働力の交換、又は労働者による自己で生産したものの労働時間を基準とした買い戻しではないのか。直接的には、とりあえず生活手段、生産手段が資本に属していること、労働力を合体させるために、生活手段の所有者である資本家が、『対象化された労働』の無所有者たる労働者に対する一方的、絶対的主導権を

もって生活資料のかわりに労働力を買い入れるからである。もちろん、これだけから資本と労働の間は等価交換、自由、平等な商品所有者間の交換という外観を維持しうる。……」

では生産手段、生活手段の資本階級独占はどこから来たか。それは資本制的生産過程においては資本家が直接的生産過程に対象化されている労働、又は労働過程が一定時間の下ではあるが、資本の下に帰属しなることの結果に他ならず、これらは直接的には、生産過程の循環蓄積の結果として資本家の生産手段独占、生活手段独占が現存していることにあるのである。」（同書一七二頁）

このように旭は、「労働力の売買を単純な流通の次元で考察し資本・賃労働の階級関係を解消することを明らかにし、それは流通過程に属する一つの仮象であって、資本・賃労働の階級関係を解消することを明らかにし、それは流通過程に属する一つの仮象であって、次に資本の直接的生産過程を考察し資本・賃労働の階級関係を解消することを明らかにし、それは流通過程に属する一つの仮象であって、次に資本の直接的生産過程を考察へと移っている。そして、この資本の直接的生産過程の考察において、対象化された労働による生きた労働の支配を発見し、それでもって「賃金奴隷制」に対する基本的な見解としてしまっているのである。だから、旭にあっては、資本の蓄積過程の分析は、「賃金奴隷制」に新たな内容をつけ加えるものではない。

「ところでこの生産物価値の再投資部分のうち、可変資本は、生活資料の実在として、資本家の手もとに入り、今それは労働力の購売手段として用いられようとしているのである。それ故流通過程の問題としてではなく、生産過程の連続性においてとらえその一契機としての流通過程において考察するならば、当初の労働者の所有と、生活資料（並びに生産手段の資本家的所有の出合いは偶然的なものとしてではなく、その本質において把握することを可能とする。即ち労働者の過去における労働の成果が現今の労働力売買に用いられるのである。……ここでは『労働力—生活資料の交換』その ものが対象化された過去の自分の労働による自己の労働力の購買という関係においてますとえられ生産過程より、生産過程の一契機としての流通過程の等価交換は単なる仮象にすぎないことが明らかになるのであった。」（同書一七二頁）

このように旭にあっては、資本の蓄積過程の考察は、すでに資本の直接的生産過程で明らかにされた支配・隷属関係を「その本質において把握する」ことであり、「等価交換は単なる仮象」であることを暴露するものにすぎないというわけである。こうして旭は、「資本論」の資本の蓄積過程を研究していながら、その内容を正しく把握していない。マルクスが個々の資本家と個々の労働者の取り引きをその分析し、労働者が自分の労働力と引きかえに賃金を得るというこの交換は、等価交換とはみなしえないものであり、資本への転化の結論に対する誤った解釈をもってきしめくくっている。

この旭の蓄積論における混乱は結局は、資本の直接的生産過程を商品交換の法則にもとずく所有と労働との分離として解明し、資本の蓄積過程の考察によって明らかにされる資本・賃労働関係を明らかにしたのであるべきであった。

ところが旭は、ここではもっぱら、マルクスの単純再生産の考察の視点のみに固執し、単純再生産から内容的には、所有と労働との分離を解明しえなかったのである。

（四面十段より）

（『資本論』(1)六一六頁）

（『資本論』(1)六一四頁）

（『資本論』(1)六一五頁）

（『資本論』(1)六一六頁）

（『資本論』(1)六一六頁）

（『資本論』(1)六一六

マルクス、エンゲルス、レーニンの国家と法に対する学説（上）

〈冒頭陳述掲載に際しての編集部註記〉

ここに掲載するのは、榎原同志が一九七七年二月三日に京都地裁で陳述した起訴状に関する認否の意見表明の一部である。榎原同志の意見表明は第一章ブルジョア国家と法に対する態度、第二節マルクス・エンゲルス・レーニンの国家と法に対する学説、第三節ブルジョア国家と法に対する諸党派の見解に対する批判、第四節プルジョア憲法に対する批判、第四節国家と法に対するマルクス・レーニン主義の理論の復権、第二章爆発物取締罰則に対するわれわれの態度、といった予定で現在数回の公判期日を要して続けられている途中である。収録した部分は第一章第二節に相当するものであるが、われわれがマルクス・エンゲルス・レーニンの国家と法に対する学説を復権していく上で基礎となるべき内容がまとめられており読者諸君の活動に役立つことを確信している。

1 物質的諸生産関係と国家

マルクスは彼の最初の体系的な経済学批判の著作を公開するに当って序言を付し、「法的諸関係ならびに国家諸形態は、それ自体からも、またいわゆる人間精神の一般的発展からも説明されるものではなく、むしろ物質的な諸生産関係に根ざしているものであって、これらの諸関係の総体をヘーゲルは、一八世紀のイギリス人およびフランス人の先例にならって市民社会という名のもとに総括しているのであるが、しかしこの市民社会の解剖学は経済学のうちに求められなければならない」（『経済学批判序言』）と述べた。

この観点は、若きマルクスが、ライン新聞時代に経済問題に目を開かされ、その後試みたヘーゲル国法論批判を法学の土壌の上で完成させないままに、エンゲルスと共に『ドイツイデオロギー』を執筆してゆく過程で確立されたものである。その後マルクスはブルジョア経済学を批判する作業を通じて、ブルジョア社会の経済的運動法則を明らかにし、こうすることによって国家と法に対する正しい学説を作りあげることができたのであった。

マルクスは『経済学批判』の続きを作成し、それを『資本論』という独立した著作へと仕上げてゆく過程で物質的な諸生産関係と国家形態との関連について、一層科学的な規定を行っている。

「不払剰余労働が直接的生産者から汲みだされる独自な経済的形態は支配、隷属関係を規定するがこの関係は直接に生産そのものから生まれてきて、それ自身また規定的に生産に反作用する。

しかし、またこの関係の上には生産関係そのものから生じてくる経済的共同体の全姿態が築かれ、また同時にその独自な政治的姿態も築かれる。

生産条件の所有者の直接的生産者に対する直接的関係―この関係のそのつどの形態は当然つねに労働の仕方の、したがってまた労働の社会的生産力の一定の発展段階に対応している―この関係こそはつねにわれわれがそのうちに社会的構造全体の、したがってまた主権、従属の関係の政治的形態の要するにそのつど独自な国家形態の最奥の秘密、隠れた基礎を見いだすところのものである。」（『資本論』第三部）

かくして今日のブルジョア国家とブルジョア法に対する正しい知識を得るためには、それの「隠れた基礎」である資本制的生産様式についての分析を不可避としていることによって、われわれは、ブルジョアジーとプロレタリアートの間の支配、隷属関係を明らかにすることができ、ブルジョア国家に対する正しい知識を得るための前提条件をかちものとすることができるのである。このことからまた、ブルジョア国家に対する誤った見解には、その根底に必ず、誤った資本主義批判が、資本制的生産様式に対する誤った見解にもとずくブルジョアジーとプロレタリアートの間の支配、隷属関係に対する誤った見解が横たわっているということを導かれてくる。

このことをしっかりと確認しておく事は重要である。われわれはブルジョア国家に対する誤った見解に対しては、単に正しい国家学説を対置させるだけでなく、ブルジョア国家に対する誤った見解の根底に横たわっている、誤った資本主義批判に対する批判と、プロレタリアートの階級的立場から、ブルジョアイデオロギーを批判することが可能となり、その批判によってプロレタリアートに共産主義的意識を直伝することができるのである。

今日いわゆる史的唯物論なるものが大流行し、ブルジョア国家に対する誤った見解に対して「史的唯物論」を対置して事足れり、とする傾向が、日本共産党のイデオローグ達の間で支配的である。だが彼らのそれは、単に「史的唯物論」なるものは革命理論とは無縁な歴史の解釈学であり誤った資本主義批判に基礎をもったものである。それはブルジョア社会におけるプロレタリアートの経済的地位とその役割についての誤った見解によって毒されており、その批判に屈服したものであった。

カウツキーが、暴力革命とブルジョア国家機関の粉砕というマルクス主義の原則をあいまいにし、これを「国家権力をたたかいとる」といった言葉で歪曲したのは、議会制度と官僚制度を社会主義社会においても必要な機関と考え、選挙による議会での多数獲形成をプロレタリアートの権力と考えていたことによる。だから、ブルジョア国家機関の粉砕というマルクス主義の原則と、無政府主義者の国家廃止論との区別を見ることが出来ず、ベルンシュタイン等による、マルクス主義とブランキ主義アートはブルジョアジーを打倒すれば国家をも即時に廃止すべきであるという考え方に対して、マルクス・エンゲルスが永年にわたって展開してきた理論闘争の意義を正しく把握していなかった。だからこの理論は、マルクス主義の国家学説を、無政府主義者の国家廃止論と同一視しているブルジョア及び小ブルジョアイデオローグからのマルクス主義批判に対して正しく反論できず、その批判に屈服したものであった。

カウツキーが、暴力革命とブルジョア国家機関の粉砕というマルクス主義の原則をあいまいにし、これを「国家権力をたたかいとる」といった言葉で歪曲したのは、議会制度と官僚制度を社会主義社会においても必要な機関と考え、選挙による議会での多数獲形成をプロレタリアートの権力と考えていたことによる。だから、ブルジョア国家機関の粉砕というマルクス主義の原則と、無政府主義者の国家廃止論との区別を見ることが出来ず、ベルンシュタイン等による、マルクス主義とブランキ主義

2 マルクス主義国家学説の完成者としてのレーニン

マルクスはその主著『資本論』を未完のまま死んだこともあり、国家学説に関する体系的な叙述を残すことはできなかった。とはいえ、マルクスはその生涯において国家学説の体系的な叙述の機会を得ようと努力していたことは、明らかであった。エンゲルスはマルクスの遺言執行を意識して、その晩年に『家族、私有財産及び国家の起源』を書き、国家の発生とその特徴、その本質についてのマルクス主義の学説を仕上げた。マルクスが残した国家学説を深く研究し、それを日和見主義者達からの歪曲から守り、体系的な著作へとまとめあげたのはレーニンであった。レーニンの努力によってマルクス・エンゲルスの国家学説の革命的内容が歴史的かつ体系的に整理され、学説として完成させられた。だからわれわれは、国家と法に対する共産主義者の態度につづいて述べる際には、何よりもレーニンの『国家と革命』を学ばなければならないのである。

「われわれは、はじめに、マルクス・エンゲルスの国家学説を考察し、この学説の忘れ去られたか曰和見主義的歪曲をこうむっている（国家と革命）」といった観点からレーニンは、マルクス・エンゲルスが多くの著作や手紙のなかで国家に関する学説について述べた部分に注目している。そして彼は『家族・私有財産及び国家の起源』でエンゲルスが与えた国家の成立、その特徴、その本質についての叙述を手がかりとして、マルクス主義の国家学説を定式化し、そのうえにたって、マルクス、エンゲルスの著作と活動を歴史的関係において研究し、その学説が「一つの革命の経験の教訓を分析することによって、これらの見解を詳しく、具体的に発展させた」（『国家と革命』）ものであることを示し、日和見主義者の歪曲からマルクス主義の国家学説を救っている。

レーニンが『国家と革命』で主要に批判の対象とした日和見主義者の理論は、当時のインターナショナルの支配的な理論であったカウツキー派のものであった。その理論が階級支配の機関であることも階級対立が和解できないことも「理論的には」否定されていないが、しかしプロレタリアートがブルジョアジーを打倒し、プロレタリアートの政治的支配を勝ちとるためには、暴力革命が不可避であり、ブルジョア国家機関を破壊することが不可避であるということを認めようとしないところにあった。この理論は、ブルジョア及び小ブルジョアイデオローグの、国家を階級対立を和解させる機関であるとする考え方と

3 国家の発生について

「国家はけっして外部から社会におしつけられた権力ではない。同様にそれはヘーゲルの主張するような『倫理的理念が現実化したもの』でも、『理性が現実化した』ものでもない。それはむしろ一定の発展段階における社会の産物である。それは、この社会が自分自身との解決しえない矛盾にまきこまれ、自分ではらいのけることのできない、和解しえない諸対立に分裂したことの告発である。

ところで、これらの諸対立が、すなわち相対抗する経済的利害をもつ諸階級が、無益な闘争のうちに自分自身と社会をほろぼさないためには、外見上社会のうえに立ってこの衝突を緩和し、それを『秩序』のわくにとどめる権力が必要となった。その社会から生まれながら社会のうえに立ち、社会からますます外的なものとなってゆく権力が国家である」（『家族、私有財産及び国家の起源』）

エンゲルスはモルガンの労作『古代社会』を研究し、国家の発生についてこのように述べた。レーニンは、このエンゲルスの学説を引用し、「ここには国家の歴史的役割とその意義についてのマルクス主義の基本思想が、まったく明瞭に言いあらわされている。国家は階級対立の非和解性の産物であり、その現れである。国家は階級対立が客観的に和解されることができないところに、またそのときにその限りで発生する。逆にまた国家の存在は階級対立が和解できないものであることを証明している。……国家は階級支配の機関であり、一階級が他の階級を抑圧する機関であり階級の衝突を緩和させるがらこの抑圧を法認し強固なものにする『秩序』を創出する」（『国家と革命』）と述べた。レーニンはまた、スヴェルドロフ大学での国家についての講義で次のように述べている。

「歴史の示すところでは諸階級への社会の分裂―つまり、その一方が他方の労働をたえずわがものとすることができるような、そこでは一方が他方を搾取するような人間集団の分裂」が生じたところで生じたときはじめて、人々を強制するための特殊な機関としての国家が出現したのであった。……

国家―それは一階級の他の階級に対する支配に維持するための機構である。この社会に階級がなかったころ、奴隷制時代の生活にさいだって、大きな平等が維持されていた原始的条件のもとで、まだ極めて低い労働生産性の条件のもとで人々が働いていたころ、そのころには残りの社会全体を統治し支配するために専門的に分離した特殊な人間集団は発生しなかったし、また、発生するはずもなかった。諸階級への社会の分裂がもっとも粗野な形態の農耕労働にもっぱら従事し、いくらかの余剰を生産できるようになったとき、この余剰が奴隷のこのうえない みじめな生活をささえるのに絶対に必要ではなくなって奴隷所有者の手にはいるようになったとき、こうして奴隷所有者の階級の存在が固まったときにはじめて、この階級の存在を固めるために、国家の出現が必要となったのである」（『国家について』）

つまり国家と呼ばれるものは、一階級が他の階級に対する支配を維持するための機関であり、人間社会（物質的諸生産関係の総体）から分離された統治のためのある種の強制機関、暴力機関を恒常的に保持しているような人間の特殊な部類から成りたつものである。こうした機関は階級の発生によって社会のなかに和解しえない諸対立が生まれたときにはじめてあらわれたのである。

4 国家の特徴について

エンゲルスは、いまだ国家のなかった氏族社会の組織と、階級の発生によって出現した国家の組織とを比較し、国家の特徴として次の諸点をあげている。

「古い氏族組織に比較しての国家の特徴は、第一に地域による国民の区分である。……第二はみずから武装力として組織する住民とはもはや直接的には一致しない、一つの公的暴力の設定である。このような特殊な公的暴力が必要なのは、住民の自主的に行動する武装組織が不可能となったからである。

この公的権力を維持するためには、国家の公民の献金が必要であり、また国家が徴税権、公債権を用いてもなお、まったく明瞭に言いあらわされている。国家は階級対立の非和解性の産物であり、その現れである。国家は階級対立が客観的に和解されることができないところに、またそのときにその限りで発生する。逆にまた国家の存在は階級対立が和解できないものであることを証明している。……国家は階級支配の機関であり、一階級が他の階級を抑圧する機関であり階級の衝突を緩和させるがらこの抑圧を法認し強固なものにする『秩序』を創出する」（『国家と革命』）と述べた。レーニンはまた、スヴェルドロフ大学での国家についての講義で次のように述べている。

「歴史の示すところでは諸階級への社会の分裂―つまり、その一方が他方の労働をたえずわがものとすることができるような、そこでは一方が他方を搾取するような人間集団の分裂」が生じたところで生じたときはじめて、人々を強制するための特殊な機関としての国家が出現したのであった。……

国家―それは一階級の他の階級に対する支配に維持するための機構である。この社会に階級がなかったころ、奴隷制時代の生活にさいだって、大きな平等が維持されていた原始的条件のもとで、まだ極めて低い労働生産性の条件のもとで人々が働いていたころ、そのころには残りの社会全体を統治し支配するために専門的に分離した特殊な人間集団は発生しなかったし、また、発生するはずもなかった。諸階級への社会の分裂がもっとも粗野な形態の農耕労働にもっぱら従事し、いくらかの余剰を生

国家が社会の諸階級の利害から超越した、社会の一般的な利害を代表し、国家があたかも諸階級的な社会の公的な機関であるかのように考えるイデオロギーが生み出される根拠となっている。この点についてエンゲルスは次のように指摘している。

「哲学的な考え方からすれば、国家は『理念の実現』である。すなわち哲学的な用語に翻訳された地上の神の国であり、永遠の真理と正義とが実現されるべき領域である。そしてここから次に、国家に関連するあらゆる事物にたいする迷信的崇拝が生まれてくる。そして人々は子供のときから社会全体の共同事務や共通の利害は、これまでやってきたようなやりかたでしか、つまり国家とその上級官庁の手でしか処理することができないと考えるだけになおさらそうした迷信的崇拝が生じやすいのである。そこで世襲君主制にたいする信仰をすてて、民主主義共和制を信奉するようになると、それだけで、まったく大した大胆な一歩をすすめたように思いこむ。しかし実際には、国家は一階級が他の階級を抑圧するための機関にほかならないのであって、しかもこの点

RG被告団結成アピール

すべての同志、支持者諸氏に、RG被告団結成のアピールを届け公判闘争にのぞむ決意を明らかにしたい。

(1)

検察官はがRG被告団に結集する十名の同志達に不当な起訴攻撃をかけ、裁判所は検察官と結託して今なおすべての同志を勾留し六名に対して接見禁止を科している。更に、坂井同志に対する火薬類取締法違反の追起訴、爆取一条違反関係等の同志達の統一公判要求に対する何ら正当な理由のない拒否と分割審理の強行、すでに始められている爆取裁判における、検察官の自ら為した公訴提起に対しての事柔軟判拒否とそれへの裁判所の追随等、検察官、裁判所のわれわれの判闘争に対する攻撃は強化されている。

これらの検察官、裁判所の攻撃は、昨年十月三日から始まる政治警察の悪らつ・卑劣・醜悪を捜索・逮捕・取調べ攻撃（その詳しい手口は『RG救対ニュース』各号参照）と同質の、共産同（RG）解体、RG打倒闘争殲滅をめざした攻撃の一環である。われわれ被告団は、これら、プルジョアジーの階級的利益のために暴力であろうが非合法的手段であろうが何でもやるのだという政治警察、検察官、裁判所の攻撃を怒りをこめて弾劾する。

(2)

しかし、このようなブルジョア国家権力のなりふりかまわぬ攻撃は成功しているのであろうか。否である。

検察官は爆取裁判においてわが同志達の「治安を妨げる目的」をいいくることによっては、何かたしかなことを明らかにすることは出来ない。法のこうした構造についてエンゲルスは次のように看破している。

「社会がさらに発展するにつれて、法律は発達して、多少とも包括的な立法をかたちづくる。この立法が複雑になればなるほど、立法の表現の仕方は、社会の通常のものを顧しようとしてきた。だがその攻撃によって「治安」の維持は達成されると考えているのかそれは無意味で不可能である。

なぜなら、ブルジョアジーが、プロレタリアートを経済的に服従させプロレタリアートにあらゆる形の隷属、社会的悲惨、精神的退化、政治的従属を負わせて階級支配している限り、プロレタリアートの反抗とブルジョアジーを打倒しようとする革命運動は必定だからであり、われわれが、プロレタリアートの政治闘争の継続である革命戦争に対して階級支配の廃止を目標とする階級戦争を主張し、革命的プロレタリアートの心をとらえることはまったく可能なことであるからだ。

更に、検察官は「爆発物」の使用・製造・所持を取締り、罰するとする。しかし、資本制的生産様式自身が、その墓場人たるプロレタリアートを生み出し、単に「爆発物」のみならず、あらゆる形でブルジョアジーを打倒する武器をプロレタリアートに与えているではないか。そして、六〇年代末から七〇年代初めの武装闘争、革命戦争の発展のなかで革命的プロレタリアートは「武器の知識を獲得し武器の使い方に習熟し武器を持ちこたえるのはいかに大々的に反抗階級は、抑圧され、虐殺され、奴隷として取り扱われて生存がないとしたのであり、それゆえにこそ「（レーニン）ということを教訓いまだに、ブルジョアジーにとって厄介な「爆弾事件」がなくならないのではないか。

政治警察、検察庁、裁判所が、同志達の「治安を妨げる目的」なパーンをくりひろげ、ブルジョアジーの恐怖をプロレタリアート大衆に押しつけ、類のない・集中した・爆取一、三、八、九条の乱発適用による捜索、逮捕、押収攻撃起訴、有罪長期刑攻撃を行なおうとも、それは逆に、革命戦争、武装闘争を手段とする革命運動の基盤の広さと深さの増大を示し、ブルジョアジーの階級支配の深刻な動揺をみせていることに他ならないのである。

われわれは、階級戦争としての革命戦争の正当性を主張し、ブルジョアジーの武装闘争、革命戦争に対する憎悪と恐怖を暴き立て、「治安」の維持、「公共の安全と秩序」の維持なる名目でプロレタリアートから闘争手段と闘争方法を奪い取る策動を告発し、プロレタリアートの武装についての正しい思想と実践とを普及させねばならない。

(3)

今回のブルジョア国家権力のわが共産同（RG）への攻撃は、わが党建設の大きな試練であった。

結論的に言って、今回の攻防の中で増々、スターリン主義を打倒し、反スター・マルクス主義を掲げ、革命的マルクス・レーニン主義の復権の下に国際非合法党を建設する路線の正しさを確信しとしてよいだろう。

政治警察の取調べにおける侮辱ののしり、さげすみをまじえた手をかえ品をかえての思想攻撃に対しては、小ブル的個人主義ではなく、あくまでプロレタリアートの階級的立場に立った共産主義意識に立脚してのみ、はじめて闘争として闘い得るのであり、かくすることによって、プロレタリアートのたどるべき道、すなわち、プロレタリアートの経済的解放のために、ブルジョアジーを打倒し、ブルジョア国家権力を破壊し、プロレタリア独裁権力樹立と暴力革命によって果たさねばならないという道を固く心に刻みつけたのである。

また、われわれは、多数の同志が獄中に捕われ、政治警察の集中した攻撃という新たな条件にあっても、中央集権主義の組織思想に導びかれ、党組織活動の発展と昂揚をかちとり、この組織に対する原則的思想の真価を確認し、指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化における多大な教訓を得たし、また得つつある。そして逮捕された同志達は、政治警察の思想攻撃にうちかち、黙秘を貫徹し（特に田中同志においては、廃人化・獄死攻撃の責任中で不屈不退転で闘い抜き）、政治警察の驚異革命家に対するケチつけ攻撃にもかかわらず、政治目＝軍事委員会、RG＝政治軍隊の指導性と革命的伝統を防衛、鼓舞・その正しさを獄中においても立証したのである。

このように、ブルジョア国家権力が当初もくろんだ、われわれへの組織解体攻撃の階級的意図は、われわれの強じんな闘いの前に打ち砕かれ、かえって、われわれの側の強い結果をもたらしているのであるが、もとより、われわれは昨年十月の一斉捜査・逮捕攻撃を許したこと、及びすでに妥協したとはいえ、一部の同志の一時的な屈服を許したことの主体的、組織的な総括を回避、隠ぺいしようとは思わない。

すでに開始しているこれらの総括作業は党建設の新たな段階の創出に重要な内容を準備している。すなわち、政治的闘争と全面的政治闘争の計画、それと結びついた党書活動を軸とした党活動への転換、これらは指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化、組織の秘密の機能の集中と運動のその他の機能の専門化にもとずき、われわれの党活動を更に発展させるとともに、豊富な深化させた内容をつけ加えることになるであろう。

われわれは、政治警察の非合法党破壊攻撃を打ち砕り、党建設の第一・第二段階の地平を正しく継承し、今回の政治警察との攻防を正しく総括し、党建設の新たな段階を創出するために党に対する責任を果たしてゆくであろう。

(4)

かようにして、われわれ被告団は、党建設のために一定の役割をもち、公判闘争において、ブルジョアジーの階級的意志を告発し暴露し、共産主義と革命党の宣伝を担ってゆくだろう。被告団は、この役割を一層効果的に果たし、ブルジョアジーとその国家権力に対して倍加した攻撃を加えんがために結成された。弁護団、救対、支援団体の諸兄姉の援助の下にこの任務を果たしてゆきたい。

最後に、われわれ被告団は、公判闘争がわれわれの革命党建設に勝利し革命に勝利するための活動に従属したものであると考えていることを明らかにしておく。

一九七七年六月二日

5 ブルジョア国家の発生について

「常備軍、警察、官僚、聖職者裁判官という、いたるところにゆきわたっている諸機関――体系的で階層制的な分業の方式にしたがってつくりあげられた諸機関――をもつ中央集権的な国家権力は、絶対君主制の時代に始まるものであって、生まれかけていた中産階級社会にとって、封建制度とたたかうための強力な武器として役立った。とはいえ、この国家権力の発展は、あらゆる種類の中世的がらくた、すなわち、領主権や、地方的特権や、都市およびギルドの独占や、地方的法制によって、なおも妨げられていた、十八世紀のフランス革命の巨大な障害は、過ぎ去った時代のこれらの遺物をことごとく一掃し、こうして同時に、社会の一環から、近代的な国家構築物という上部構造の成立を妨げていた最後の障害物をとりのぞいた。この近代的な国家構築物は、第一帝政時代に成立したものであって、その第一帝政それ自体は、近代フランスに対する古い半封建的ヨーロッパ同盟戦争の生みの子であった。それにつづく諸統治の時期には、政府は議会の統制のもとに――すなわち有産階級の直接の統制のもとに――おかれて、巨額の国債・苛酷な重税の温床になったばかりではなかった。また官職や役得や、引立てという、逆らうこと出来ない誘惑物によって、支配階級の相争う諸分派や冒険者たちのあ・だの争いのタネになったばかりではなかった。社会の経済的変化にともなって、また政府の政治的性格も変化した。近代工業の進歩が資本と労働の階級敵対を発展させ、拡大し、強化するのと歩調をともにして、国家権力は、労働に対する資本の全国的権力、社会的奴隷化のために組織された公的権力、階級專制の機関という性格をますますおびるようになった。すべて階級闘争の一前進段階を画する革命のあとでは、国家機構――体系的な分業の方式にしたがってつくりあげられた諸機関――は、絶対君主制の時代に始まるものであって、生まれかけていた中産階級社会にとって、封建制度とたたかうための強力な武器として役立った。とはいえ、この国家機構の発展は、あらゆる種類の中世的がらくた、すなわち、領主権や、地方的特権や、都市およびギルドの独占や、地方的法制によって、なおも妨げられていた、十八世紀のフランス革命の巨大な障害は、過ぎ去った時代のこれらの遺物をことごとく一掃し、こうして同時に、社会の一環から、近代的な国家構築物という上部構造の成立を妨げていた最後の障害物をとりのぞいた。この近代的な国家構築物は、第一帝政時代に成立したものであって、その第一帝政それ自体は、近代フランスに対する古い半封建的ヨーロッパ同盟戦争の生みの子であった。それにつづく諸統治の時期には、政府は議会の統制のもとに――すなわち有産階級の直接の統制のもとに――おかれて、巨額の国債・苛酷な重税の温床になったばかりではなかった。また官職や役得や、引立てという、逆らうこと出来ない誘惑物によって、支配階級の相争う諸分派や冒険者たちのあ・だの争いのタネになったばかりではなかった。社会の経済的変化にともなって、また政府の政治的性格も変化した。近代工業の進歩が資本と労働の階級敵対を発展させ、拡大し、強化するのと歩調をともにして、国家権力は、労働に対する資本の全国的権力、社会的奴隷化のために組織された公的権力、階級專制の機関という性格をますますおびるようになった。すべて階級闘争の一前進段階を画する革命のあとでは、国家機構――体系的な分業の方式にしたがってつくりあげられた諸機関――は、絶対君主制の時代に始まるものであって、生まれかけていた中産階級社会にとって、封建制度とたたかうための強力な武器として役立った。とはいえ、この国家機構の発展は、あらゆる種類の中世的がらくた、すなわち、領主権や、地方的特権や、都市およびギルドの独占や、地方的法制によって、なおも妨げられていた、十八世紀のフランス革命の巨大な障害は、過ぎ去った時代のこれらの遺物をことごとく一掃し、こうして同時に、社会の一環から、近代的な国家構築物という上部構造の成立を妨げていた最後の障害物をとりのぞいた。この近代的な国家構築物は、第一帝政時代に成立したものであって、その第一帝政それ自体は、近代フランスに対する古い半封建的ヨーロッパ同盟戦争の生みの子であった。それにつづく諸統治の時期には、政府は議会の統制のもとに――すなわち有産階級の直接の統制のもとに――おかれて、巨額の国債・苛酷な重税の温床になったばかりではなかった。また官職や役得や、引立てという、逆らうこと出来ない誘惑物によって、支配階級の相争う諸分派や冒険者たちのあ・だの争いのタネになったばかりではなかった。社会の経済的変化にともなって、また政府の政治的性格も変化した。近代工業の進歩が資本と労働の階級敵対を発展させ、拡大し、強化するのと歩調をともにして、国家権力は、労働に対する資本の全国的権力、社会的奴隷化のために組織された公的権力、階級專制の機関という性格をますますおびるようになった。機械が、ますます労働の差異をけしとり、賃金をほとんど経済的な生活条件の現われる仕方からますますかけ離れてゆく。立法は自立的な要素のように見えてくる。つまり、みずからの存在理由とそれがひきつづき発展してゆく基礎づけとを、経済関係のなかから得てくるのではなく、それ自身の内的根拠のなかから、たとえば『憲法概念』のなかから得てくる要素のように見えてくる。人間は自分の起源が動物界にあることを忘れてしまったのと同様に、彼らの法の起源が彼らの経済的生活条件にあることを忘れてしまう」（『経済問題』）

このように国家が成立すれば、支配階級は、自らの階級的利害に社会の一般的な利害の形態を与えて国家意志としてそれを主張するようになるので、支配階級の階級的利害は超階級的な利害という外見をもってあらわれる。そればかりか、支配階級のイデオローグたちは、この一般的な利害の形態をとっている支配階級の階級的利害を国家及び法そのものに内在的なものと考え、国家及び法がそれ自身において発展してきたものとして主張する。こうして物質的諸主産関係に根ざした支配・隷属の関係が

属関係に対して不断に反逆し、やがては自己の政党を組織し、プルジョアジーは、プルジョア国家によって、プロレタリアートの解放闘争に対して抑圧し、一つの「秩序」を与えようとする。だから、プロレタリアートがブルジョアジーと闘争するためには、何よりも資本制的生産様式の経済的運動法則を認識し、自からの経済的地位とその役割を知ることが必要なのである。

「（フランスの内乱）

こうしたブルジョア国家の発生と発展の背後には、資本制的生産様式の発生と発展がある。マルクスはその発展過程を『共産党宣言』で描いているが、その概略を示しておこう。

ブルジョアジーは、旧い封建的なヨーロッパに対して、革命的な変革をなしとげた。大工業は世界市場をつくりだし、世界市場は商業に、航海に、陸上交通にはかり知れない発展をもたらし、その発展がまた、工業の拡大に反作用をした。そして工業、商業、航海、鉄道の拡大に比例して、ブルジョアジーは発展し、その資本をふやし、中世からうけつがれたすべての階級を背後におしやった。

ブルジョアジー、すなわち資本が発達するに比例して、プロレタリアート、すなわち近代労働者の階級も発達する。彼らは仕事のあるあいだだけしか生きられず、その労働が資本をふやすあいだ・だけ仕事にありつけない。

近代工業は資本家を長時間の小さな仕事部屋を工業資本家の大工場にかえた。労働者大衆は工場につめこまれて軍隊式に編成される。彼らは産業兵として士官と将校との完全な職階制の監督のもとにおかれる。彼らはブルジョア階級のブルジョア国家の奴隷であるばかりでなく、毎日毎時間機械の、監督の、そしてなによりも工場主たち個々のブルジョア自身の奴隷とされている。

工業の発展とともにプロレタリアートはその数をますますかのぼる。それは、ますます大きな集団に結集され、その力は増大し、そしてますます自らの力を感じるようになる。機械がますます労働者の賃金をほとんどなくしてしまうにつれて、労働の価値はますます下がる。競争はますます激しくなり、労働者の生活はますます不安定なものとなる。ますます急速に進むたえまない機械の改良は、労働者の生計をいよいよ不安定なものとする。個々の労働者と個々のブルジョアとの衝突は、ますます階級の衝突の性質をおびてくる。……

このように描かれているブルジョア社会の発展と階級闘争の激化をを知ることこそが、ブルジョア国家の発生と発展についての知識を得る上で不可欠なのである。マルクスはフランスにおけるブルジョア国家の発生と発展を具体的に分析し、その国家権力の発展過程をえがき出した。ブルジョア国家がブルジョア社会の発展にともなって、プロレタリアートに対する資本の全国的権力としてその抑圧的性格をますますあらわにするというこの発展過程は、日本のブルジョア国家権力についても妥当している。

（つづく）

臨時カンパの要請

全国の先進的労働者諸君！夏期一時金等の圧倒的カンパを要請します。

昨年十・二三検挙攻撃からすでに九ヵ月、我々共産主義者同盟（RG）は、政治警察・検察・裁判所・拘置所との総力を上げた闘いを闘ってきました。

今、我々は「赤報」二一号を発行するに至り、党建設の新たな段階の獲得へ向けて次の第一歩を踏み出そうとしています。

我々は中央集権主義の組織思想にもとずき、非合法組織、合法組織、獄中の力を一体化させ、固く密集して進む決意です。

今日の階級構勢の激動が要請する党的課題を我々は敢然として受けとめ、革命的プロレタリアートの利益を代表して闘い抜くでしょう。我々は今回の政治警察との闘争の教訓を一つ一つ総括しながら、党建設を勝ちとっていくでしょう。我々の事業は先進的労働者諸君の援助を必要としています。労働者階級の解放は一つの共産主義政党の闘争へと階級の力が統合されるかどうかにかかっていることをふまえて、圧倒的カンパを集中されるよう要請する次第です。

共産主義者同盟（RG）
中央委員会

〈カンパの送り先〉
第一勧業銀行虎ノ門支店
〇四六一二六一六二〇
（堀江幹男）

RG救対ニュース
発売中!!
〈連絡先〉
横浜中央郵便局
私書箱17号
木せい社